
あの頃の私達へ

瑠依

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの頃の私達へ

【Nコード】

N2694Q

【作者名】

瑠依

【あらすじ】

出来の良い義弟に劣等感を抱いていた凜は、ある日突然異世界へと飛ばされてしまう。その世界はある魔術師が開発した魔術の影響により、崩壊の危機に面していた。魔術に侵された人々は、狂気に狂い襲い掛かってくる。

そんな中、凜は一人の海賊と出会う。凜は、彼と彼の仲間に関わっていく間に、その世界の運命の中へと、身を投じていく事になる。

第一話

食欲者と出会えば、すぐ逃げる。肉を喰い千切られ、貪り喰われるぞ。睡眠欲者と出会えば、幸運者。足音立てずに、その場を離れる。性欲者と出会えば、天国行き。快樂と共に、どの道御陀仏さ。この世界で、この唄を知らない者はいない。誰が作ったのかは知らないが、皮肉なものだ。この世界では、この唄が絶対のルール。もし逆うのならば、待っているのは闇の世界のみ。

「はあっ、はあはあ、くっ。」

もう、どれくらいの時間を走り続けたのだろう。薄暗い森の中、私は迫り来る木々達を、覚束無い足取りでかわしながら、懸命に走り続けていた。休んでいる暇は無い。いや、そんな暇は与えられない。後ろから追い掛けてくる三人の人影が、まるでやっと見つけた獲物であるかのように、私だけを一心に見つめて追い掛けてくる。すぐ傍にあつた大きな岩の陰に隠れると、三人の足音は岩陰に隠れた私には気がつかずに、通り過ぎて行った。

「はあ。」

思わず安堵の息を漏らすと、岩に凭れ掛かり空を仰ぎ見る。木々の隙間から微かに見える空は、厚い雲に覆われ、どんよりとしている。乱れていた息も整い始め、私は辺りを見回した。生い茂る木々の所為もあり、森の中はまるで夜のように薄暗い。

どうして、こうなった。

今日は、普通に学校に行つて、普通に授業を受けて、普通に友達と会話して、普通に……。とにかく、いつもと変わらない普通の

生活を送っていた筈だ。それが、どうしてこうなった。何処まで行っても、見渡す限りは木ばかり。高校の制服姿で彷徨う私。そしてやっと見つけた人影に意気揚々と駆け寄ると、なんと彼らは私に噛み付こうとしたのだ。間一髪で避けたものの、あれは尋常ではなかった。それに此処が日本の何処なのか、全く検討も付かない。いや、そもそも此処は本当に日本なのだろうか。先程、私を追いかけて来た三人組み。金髪に青い目、茶髪に緑の目と、明らかに日本人ではなかった。では、此処は外国なのだろうか。しかし、彼らは中世ヨーロッパという感じの古びた服を着ていた。現代の外国とも考えにくい。まるで、別の世界に来てしまったかのような。（とにかく、考えていても仕方がない。何処か安全な場所を探さなきゃ。）

果たして安全な場所など存在するのだろうか。そんな事を考えながら、私は再び歩き出した。

「もう、歩けない！」

私は草の上に寝転がった。もう何時間歩いたのだろうか。何処まで行っても変わり映えのしない景色。サバイバル経験のない私には、何処が安全そうなのかも全く分からなかった。

（もう、どうなってもいいよ。）

一人こんな所に放り出されて、私の精神は限界寸前だった。何時間も歩き続けた所為で、全身ドロドロ。ローファアを履いていた為、靴擦れも酷く、飛び出す草木の所為で、手足は切り傷だらけであった。このまま楽になるのなら、彼らに噛み殺されるのも良いのかもしれない。

（・・・良い訳ないか。）

人間に噛み殺されるだなんて、絶対に避けたいところである。とても痛そうだ。しかし、もう歩けないのも事実である。私は辺りを見回した。少し離れた所に大きな木があり、その木の上の方で枝分

かれし始めている処に大きな窪みがある。

（あそこなら。）

震える足を叱咤し、私は木の傍まで歩いて行つた。そして、そのまま木に登ろうとし、木に足を掛けるも、直ぐに滑ってしまふ。

「くそー！舐めんじゃねえぞ、コノヤロー！」

自慢ではないが、私は生粋の現代っ子である。木登りの経験などまるでないが、私に残された選択肢は、登るという事しかなかった。そうして悪戦苦闘、気合でその木を登り切り、窪みに入り込むと、今度こそ私は本当に動けなくなってしまった。

「はあはあ、駄目だ。もう手も上がらないよ。」

窪みに身体を丸めて、息が整うのを待つ。此処なら先程の連中にも見つかりにくいだろうし、野犬などの獣も上がって来れないだろう。この世界に果たして獣などいるのだろうか。そんな事を考えながら、私は眠りについた。

遠くから声が聴こえる。その声を、私は知っていた。聴きなれた声、大切に思っていた声。私の大好だった声。

——あいつの姉だと思つと、なんかそういう事、考えられないかも悪い。——

——凜には・・・愁斗に会えるかもしれないと思つたから近づいた。

——愁斗は、本当に偉いわねえ。愁斗みたいな子のお母さんになれて、本当に嬉しいわ。——

「はっ。」

私は、結構な時間を眠っていたらしい。もう既に空は黒くなり、辺り一面真っ暗だった。嫌な夢を見て飛び起きた私は、全身汗だくだった。溢れ出していた汗を拭い、思わず手で顔を覆う。

「最悪。」

もう何もかもが、嫌だった。このまま死んでしまおうか。そんな風に考えていると、遠くの方から人の声が聞こえてきたような気がした。

（気のせい？）

そう思い、もう一度耳を澄ましてみるも、やはり人の声は聞こえてこない。聞こえてくるのは、風に揺られ木々がざわめく音だけ。（空耳か。人間って窮地に追いやられると、幻聴が聞こえてくるのかも。）

気を落とし、膝を抱え蹲る。汗をかいた体に夜風が当たり、身震いする。疲れが溜まっているのか、もう一度眠りに付こうとしたその時。

——誰か！——

聞こえた！ガバつと勢いよく顔を上げた。確かに聞こえた。遠くの方から人の叫び声。

（行かなきゃ。）

私は木から降りて、声が聞こえた方へ駆け出した。ようやく、まともな人間と出会える可能性。このチャンス逃すわけにはいかない。今度は、悲鳴が聞こえた。男の人の声のようだ。悲鳴を上げているという事は、奴等に襲われている可能性が高い。つまり、私にも危険が及ぶ可能性があるという事だ。しかし、私は駆け出さずにはいられなかった。うるさいほどに鳴り続けている心臓に、嫌な予感を抱えながらも私は走り続けた。

第二話（前書き）

第二話は物語の構想上、残酷な描写が入ります。苦手な方は読むのを控えて下さいね。

第二話

声が聞こえなくなった。先程から響いていた男性の叫び声が、パツタリと聞こえなくなったのだ。奴等にやられてしまったのだろうか。最悪の結末を想像しながら、私はなるべく足音を立てないように、慎重に足を進めていった。その時であった。前方からガサガサと、何かが草を掻き分け、こちらへやって来る音がしてきたのだ。突然の出来事に驚き、私は周囲に身を隠せる場所がないか、あたふたするも、そんな場所は何所にも見当たらなかった。やがてその音は大きくなり、遂に私の目の前に大きな人影が現れた。

（もう、駄目だ！）

ギョッと目を瞑り身構えるも、相手は何の反応も示さない。恐る恐る目を開けると、其処には血まみれの男性がいて、こちらを見てその動きを止めていた。その目は大きく見開かれ、とても驚いているようだ。血まみれという別の意味で悲鳴を上げそうになったが、その男性が明らかに先程の連中とは違うという事が分かった。雰囲気気が全然違う。この人は正常だ。奴等より、この人の方が血まみれで怪しい筈だが、私には何故だか理解できた。

「あ、あの・・・」

「・・・では、ないのか？」

「え？」

男性が何か言ったが、私は聞き取る事が出来なかった。しかし、そんな事はどうでも良かった。ようやく話の出来そうな人に出会えて、嬉しくて仕方がなかったからだ。その人も私と同じ気持ちなのか、始めは驚きと警戒の表情を見せていたものの、次第にその表情を緩めていった。外国人張りの彫りの深い顔をしている癖に、日本語を話せるのかという疑問は、一端隅に置いておこう。外国人顔なので定かではないが、年齢は40歳くらいだろう。痩せており、とても疲れた顔をしている。

とにかく此処が何所なのか、先程の奴等は何なのか、色々と聞きたい事があった。そうして、もう一度男性に話し掛けようとしたその時、男性が居たすぐ横の木の陰から、何かが飛び出してきたのだ。「うわぁ！」

一瞬の出来事で頭が着いて行かず、少し経ってから、男性が飛び出してきた何かに押し倒された事が分かった。そして、その飛び出してきた何かとは、先程私に噛み付こうとした内の一人だったと気づく。咄嗟に私は男性を助けようとするも、その背後から残りの二人が現れる。二人が現れた事に驚き、私は立ち竦んでしまった。残りの二人も、倒れた男性の上に押し掛かる。

「ああ！助けてくれ！」

男性はこちらに向けて懸命に手を伸ばすが、私は一步も動けなかった。見てしまったのだ。狂気に狂った三人が男性に噛み付いている。いや違う、噛み付いているんじゃない。食べているのだ。男性の肉を食い千切り、それを飲み込んでいる。先程、三人は私に噛み付こうとしたんじゃない。

私を食べようとしていたんだ！

気づいてしまった事实に、思考が働かない。手足の震えが止まらない。何も見えない。何故、何故？

「ああああああ！」

男性の絶叫が響き渡り、その声に体が震える。男性は既に動かなくなっていた。目の前で行われている光景に呆然と立ち尽くしていると、三人の内の一人がこちらに顔を上げた。ゆっくりと立ち上がり、こちらに近づいてくる。まるで新鮮な獲物を見つけたかのような目をして、こちらに近づいてくる。

どうして、こうなった。

今日は、普通に学校に行って、普通に授業を受けて、普通に友達と会話して、普通に……。とにかく、いつもと変わらない普通の生活を送っていた筈だ。それが、どうしてこうなった。常識では考えられないような出来事が、今私の目の前で繰り広げられている。私は何をしたというのだ。

「あ、ああ……」

口の周りを血だらけにし狂気に狂った男が、とうとう私の目の前に迫っていた。私は恐怖で、足が一步も動かない。

（もう、駄目だ！）

心の中で叫んだ時だった。私の目の前を銀色の閃光が通り過ぎ、狂気に狂った男を突き飛ばしたのだ。私は急いで、銀色の方へと目をやった。

「おお・か・み？」

銀色のキラキラと光る綺麗な毛並みに蒼い瞳。其処には、一匹の大きな狼がいた。

第三話

「おお・か・・み？」

暗い暗い闇の中に現れた、一筋の銀色の閃光。深い深い蒼い瞳の銀色の毛並みをした大きな狼だった。悠然と立つその様は、とても凛々しい。思わず、その狼に見惚れてしまう。

（なんて、綺麗な狼。）

私が見つめていると、狼もジツと私を見つめ返してきた。数秒だったに違いない。しかし私には、とても長い時間見つめ合っていたように感じられた。

「ああ、あああ。」

不意に声が聞こえ、私も狼も声のした方を振り返る。先程この狼によって倒された男が、ゆっくりと立ち上がり、残りの二人と共にこちらに向かってユラユラと歩いて来ていたのだ。

「ひいっ！」

思わず、蛙を潰したような声が出た。突然狼が現れた事により、奴等の事をすっかりと忘れていたのだ。私も先程の男性のように、見るも無残に食べられてしまうのだろうか。そう思いガタガタと震えていると、私を守るかのように、狼が奴等の前に立ち塞がった。牙を剥き出しにし、低く唸り威嚇するも、奴等はそれに怯む事なくこちらにやってくる。

「あっ！」

狼が動いたのだ。奴等に向かって駆け出し、思い切り体当たりする。狼の鋭い突きに倒れた男を踏み越え、別の男が狼に手を伸ばすも、狼はしなやかにそれをかわし、再び体当たりを繰り返す。

（す、すごい・・・でも、あれ？）

目の前で繰り広げられている戦闘に驚嘆するも、少し違和感を抱く。

（あの狼、奴等を傷付けないようにしている？）

狼は牙を剥き出し、奴等に飛び掛ってはいるものの、決してその鋭い牙や爪を使う事は無く、体当たりばかりを繰り返している。どうしてだろう。そんな疑問を抱いていると、狼がこちらにやって来た。そして体を低くして、鼻を自らの背中を指すように振って、こちらを見つめてくる。まるで、背中に乗れと言っているようだ。

「・・・いいの？」

狼に倒された奴等が、呻き声を上げながら再び立ち上がろうとしている。すると、狼は早くしろとも言わんばかりに小さく唸る。

「っありがとうございます！」

私が跨ると、狼は勢い良く走り出した。突然の事で振り落とされそうになるも、しっかりとしがみつく。綺麗な毛並みなのに、思い切り引つ張ってゴメン。きつと痛いに違いない。それに、いくら狼が大きいからと言っても、一人が乗るには少々厳しいかもしれない。そんな心配をよそに、狼はどんどんスピードを上げ、あつと言う間にあの三人から遠ざかる。苦しそうではないが、息遣いが荒くなってきた。

（ゴメンね。）

私は心の中で謝った。三人の姿が見えなくなり大分離れたが、狼は走りを止めない。それから暫く、狼は走り続けた。

あれから、どの位走り続けたのだろう。重い私を背中に乗せて全力疾走している狼の方が、辛いに決まっている。しかし私は、狼に振り落とされないよう必死にしがみ付いているだけで、疲れに疲れヘトヘトになっていた。狼に申し訳ない。

不意に狼が、走るスピードを落とし歩き始めた。安全な場所に来たのだろうか。申し訳なさもあり、私は狼の背中から降りようとするも、狼は低く唸り、それを制した。まるで、面倒くさいから乗っているとも言わんばかりの唸り方だ。うう、ゴメンなさい。

そのまま暫く歩いていると、微かに塩の香りがしてきた。私は、

それを嗅いだ事があった。これは・・・

「海？」

森を抜けると、其処には海が広がっていた。白い砂浜を、狼はゆつくりと歩いていく。後ろを振り返ると、不気味な森が広がっており、砂浜には狼の足跡だけが残っていた。狼は海の直ぐ傍まで歩いていくと、立ち止まってこちらを振り返った。私はゆつくりと、狼の背中から降りる。今度は狼は止めようとしなかった。狼から降り、二、三步程歩いた所で、私は砂浜に崩れ落ちた。

「あ、あれ？」

体に力が入らない。森の中を彷徨い、狂気に狂った三人組みには追い掛けられ、また、狼に振り落とされないよう必死にしがみ付いていた私の体力は、等々限界を超えてしまったらしい。本当に、体を動かす事が出来なかった。

狼は、海の方を見ていた。私も狼につられて海の方を見ると、突然目に光が差し込んできた。どうやら、夜が明けたらしい。水平線から昇ってくる日の光に目を細める。

（綺麗。）

美しい日の出に目を奪われていると、遠くの方で一隻の船が見えた。その船は、どんどんこちらに近づいてくる。

（とりあえず、助かったのかな。）

そんな事を考えながら、私は意識を手放した。だから気づかなかったのだ。船に掲げられた大きな旗に、大きな髑髏が描かれていた事を。

第四話（前書き）

少し回想シーンに入ります。

第四話

私は幼い頃に父を亡くし、母は女手一つで私を育ててくれた。父がどんな人なのか、私は全く覚えていない。私はずっと母と二人きりで生活をしてきたが、周りの友達には皆父親がいる。私は母が傍に居てくれるだけで良かったが、母は一人で大丈夫なんだろうか。幼いながらにそんな事を考えていた私は、ある日突然母に尋ねてみた。お母さんは、お父さんが居なくて寂しくないのかと。すると母は、笑いながらこう言った。寂しくなんてないよ。だって、凜ちゃんが居てくれるもの。凜ちゃんが居てくれれば、お母さんは他には何もいらないのよ。母も私と同じ気持ちだったと知り、私はとても嬉しかった。

しかし、転機は訪れる。私が中学二年生になった春の事。母が私に、こう切り出してきたのだ。

「凜ちゃん。お母さん、再婚しようかと思ってるんだけど。」

そう言って、母は少し恥ずかしそうに笑っていた。突然の事で少し驚きはしたが、今まで女手一つで私を育ててくれた母だ。これからは私が、母に恩返しをしていかなければならない。母が幸せになるのなら、私は何も構わなかった。心の奥底に芽生えた、小さな小さな闇には蓋をした。

それから暫くして、母は一人の男の人と、私と同年くらいの男の子を連れてきた。

「凜ちゃん、こちらが堺田和彦さん。それから、息子さんの愁斗君よ。愁斗君は凜ちゃんの一つ年下で、中学一年生なのよ。」

母が私に二人を紹介し、和彦さんが私に挨拶をしてきた。

「これからよろしくね、凜ちゃん。」

「よろしくお願ひします。」

そう返事はしたものの、実のところあまり聞いていなかった。和彦さんも結構な男前だが、息子の愁斗君が私にとっては、とても衝撃だったのだ。私は今まで同世代の男の子で、こんなに格好良い男の子を見た事がなかった。パッチリ二重の大きな目、スッキリとした鼻筋に、形の良い唇。身長は私よりも高く、体は程よく鍛えられていた。髪は茶色に染めていて、ワックスで綺麗に整えられている。全てにおいて、整っていたのだ。まるで、芸能人を間近で見ているようだった。

「よろしく。姉ちゃんって呼んでいい？俺の事は、愁斗でいいよ。」
愁斗君は笑顔でそう言い、私に手を差し出してきた。
「う、うん、いいよ。こっちこそ、よろしくね。」

少し緊張しながらも、私はその手を握り返した。

和彦さんは、私達が住んでいたマンションの近くに、新築の一軒家を購入し、私達四人はこれから其処で生活する事となった。和彦さんと愁斗は元々隣の市に住んでいたらしく、愁斗が転校するという形で同居問題は落ち着いた。愁斗は今通っている学校には、通い始めたばかりという事もあり、それ程執着はないらしく、転校しなくなかった私にとっては、とても有り難い話だった。

堺田家は、愁斗が幼い頃に和彦さんが奥さんと離婚してから、ずっと二人きりで生活してきたらしい。母と和彦さんは、仕事の取引先で出会ったそうだ。それがきっかけで、二人は必然と会う機会が増え、そのまま再婚に至ったという。そして、私は堺田凜となった。私は中学二年生、愁斗は中学一年生の暑い夏の事だった。

愁斗は見掛けだけでなく、とても良い子だった。無垢な笑顔、素直な心、そして自分の意思に真っ直ぐな瞳で、私を見つめてきた。ずっと兄弟が欲しかったと言って、私の事をとても慕ってくれた。

そんな愁斗に、私も悪い気はしなかった。

私の学校に転校してきた愁斗は、とてもモテた。それは、そうだろう。容姿端麗、性格良好。更に愁斗は、頭も良く運動神経も抜群だった。これでは、女の子が放っておく筈が無い。

「愁斗君に、渡してくれない？」

私達が義姉弟になった事は、直ぐに周りに知れ渡った。私経由で、愁斗にプレゼントを渡そうとする子が、後を絶たない。また、愁斗に近づく為に、私と友達になろうとする子まで出てきた。人気者の義弟を誇らしく思う気持ちと同時に、私の心の奥底には黒いシミが増えていった。

第五話

愁斗が転校して来てからというもの、私は皆から、愁斗の姉としてしか評価されなくなっていた。私の方が、この学校に先に居たにも関わらずだ。何時しか私の周りには、愁斗を目的とした人達しか集まらなくなった。友達だと思っていた子達も、心は皆私から離れていった。愁斗が本当に良い子なのを知っている私は、彼を憎む事も出来ず、それは苦痛の日々だった。

中学校を卒業し高校へと入学した私は、肩の力を下ろし自由を満喫していた。高校は、同じ中学の人が三人しか行かない公立高校を選んだ。本当は、同じ中学の人が一人も行かない高校が良かったのだが、それだと必然的に私立高校になり、費用の面で母に迷惑は掛けなくなかった。とは言え、同じ高校になったその三人は、私とは全く免疫がなく大人しい人達ばかりだったので、私はひとまず安心した。

高校は楽しかった。此处には愁斗も居なく、私に近づく人達の中に愁斗目当ての人も居ない。全てが順調だった。私が高校二年生になるまでは。

愁斗が、私と同じ高校に入学する事になったのだ。愁斗はバスケットボール部に所属しており、頭の良い私立高校からスポーツ推薦を受けていたので、私はてっきり、その私立高校に通うのだと思っていた。確かに私の高校のバスケ部も比較的強いが、その私立高校程ではない。愁斗に理由を聞くと、私立はお金が掛かると言うのだ。和彦さんも母も、お金の事は心配しなくていいと言うも、愁斗は聞かなかった。

結局私はまた、愁斗と同じ学校に通うはめになったのだ。また中学の時のように惨めな思いになるのかと、私は一人落ち込んだ。

「また、女の子から呼び出しがあったらしいわよ。あんたの弟もやるわねえ。」

お昼休憩。私の目の前でお弁当を食べていた女の子が、呆れたようにそう言った。彼女の名前は、宮野水華。私が愁斗の姉と知っても、態度を変えなかった数少ない女の子である。サバサバとした性格で、下心ばかりだった人達の中に身を置いていた私にとって、彼女の隣に居る事はとても居心地が良かった。彼女はバスケットボール部のマネージャーをしており、私には自然と愁斗の情報が入ってくる。

「そうみたいだね。」

素っ気無く返すも、水華は特に気にした様子も無く玉子焼きを口に運ぶ。私の様子から薄々何かを感じてはいるようだが、決して口には出さず、また愁斗の話題を避ける事もなく普通に接してくれた。私には、そんな彼女の存在が有り難かった。中学の時のように愁斗目当ての人達は後を絶たないが、彼女が傍に居てくれたお陰で憂鬱になりかけていた高校生活も楽しく過ごせていたのだ。

「そういえば、今度の日曜日に練習試合があるんだけど・・・」

そう言った水華に、私はガバツと顔を上げる。水華はニヤニヤとしながら、こちらを見ていた。

「っ！」

「凜も見に来るでしょ？健矢出るよ。」

その言葉に、私は顔を赤らめた。

私には、好きな人が出来ていた。担任に頼まれ、部活中の水華にプリントを渡しに行った時の事だ。本当は愁斗がいるバスケット部には近づきたくなかったが、水華が困るといけないので渋々と体育館に向かった。体育館の周りには、沢山の女の子達がいた。きつと、愁

斗目当ての人達だろう。体育館に近づくのが億劫になっていた時、丁度水華が体育館から出て来たのだ。私は、すぐさま水華に近づいた。特に目立つ事もなく、無事に水華にプリントを渡せ、早々に立ち去ろうとした時だった。ふと体育館の方に目をやると、私は一人の男の子に目が釘付けになった。それは、隣のクラスの立花健矢。相手のデیفエンスを軽やかにかわし、華麗にゴールを決めるその姿に、私は一瞬にして恋に落ちた。

そんな私を見ていた水華には、直ぐにバレてしまった。水華は、感が鋭いのだ。それからというもの、彼女は彼の情報を私に流してくれたり、彼と話が出来よう計画してくれたり、色々と協力してくれるようになった。健矢君は隣のクラスだが、今では水華のお陰で、気さくに話を出来るようになっていた。たまに、水華と三人で遊んだりもする。彼女には、本当に感謝だ。

未だにニヤニヤとしている水華を横目に、私は日曜日の事で頭がいっぱいになっていった。

第六話

「姉ちゃん。明日の練習試合、観に来るんだって?」

日曜日が明日に迫った、土曜の夜の事。洗面所で、明日の為に念入りに化粧水を染み込ませていた私に、愁斗がそう言って話し掛けてきたのだ。おそらく、水華から聞いたのだろう。

「そうだけど。」

「どうしてまた、観に来ようなんて思ったの? 今までバスケット部には、一切近づいて来なかったのに。」

愁斗は、少し不機嫌そうな顔をしていた。何故、そんなに不機嫌そうな顔をするのだろう。

それにしても、愁斗の顔を久しぶりにちゃんと見た気がする。いや、毎日顔を合わせ会話もしていたのだが、自然と私が愁斗を避けていた。話はするも、正面向き合って愁斗を顔を見ていなかったのだ。

「・・・健矢さんを観に来るの?」

愁斗の言葉に、私はカツと顔が赤くなった。何故愁斗が、その事を知っているのだろう。一体いつから気づかれていたのか、私は柄にも無く動揺した。そんな私を見て、愁斗は不機嫌さを増す。

「やっぱり姉ちゃん、健矢さんの事・・・」

「愁斗には関係ないでしょ。」

そう言っただけ、愁斗から逃げるようにして洗面所から出た。去り際に見えた愁斗の顔は、少し寂しそうに見えた。

練習試合当日。体育館には休日というにも関わらず、多くの人で賑わっていた。そのほとんどが女の子で、おそらく愁斗目当ての人達だろう。皆バッチリと化粧をしていてキラキラと輝き、戦闘態勢充分といった感じだ。私もいつもより念入りに化粧をし、髪型も軽

くセツトしてきたが、彼女達と比べると、それはもう雲泥の差である。

（あの群れの中に、入りたくない。）

そう思うも、二階の観覧席でしか試合を観る事が出来ない為、彼女達に交ざらなければ、健矢君の試合を見る事が出来ない事に気づく。キャツキヤと騒ぐ女の子達に気後れしながらも、私は負けじとその中に入って行った。

（健矢君の試合、見逃してたまるか！）

楽しみにしていた試合、絶対に見逃してはならない。意気込みだけで進んでいくも、私は香水臭さで鼻が曲がりそうだった。

人込みを掻き分けヘトヘトになるも、ようやく私は隅っこだが見渡しの良い場所をゲットした。

（健矢君は、何処にいますんだろう。）

そう思い、私はコート内を見回す。コートには試合前のウォーミングアップの為、多くの選手が入り乱れていた。愁斗が持っていたユニホームの色は黒だったので、健矢君も黒色のユニホームを着ている筈だ。黒色のユニホームを着た選手を重点的に探していると、彼はバスケットゴール付近に立っていた。ボールの感触を確かめるかのようにドリブルをしていて、そしてゆっくりとボールを放つ。綺麗なフォームで放たれたボールは、綺麗な弧を描き、気持ちの良い音を鳴らしてゴールに吸い込まれていった。

（すごい！）

無駄のない華麗なシュートに、私は暫らく見惚れていた。

その後健矢君は、近くに居た仲間とドリブルやパスをし合ったりして、楽しそうに過ごしていた。試合前だが笑顔が見られ、大分リラックスしているようだ。

（笑ってる。かっこいいなあ。）

そうして、楽しそうにしている健矢君を見ていた時だった。ふと視線を感じ、視線の感じた方へ目をやると、ボールを手にした愁斗が静かにこちらを見ていたのだ。その表情があまりにも無表情で、

私は思わず息を飲む。

（な、何なの？）

私は直ぐに、愁斗から目を逸らした。どうして、あのような目を向けられなければならないのか。昨夜の事といい、愁斗の事がサッパリ分からなかった。

一人モヤモヤとしていると、ホイッスルが鳴った。各学校で最後の確認を終えると、スターティングメンバーがコート内に入る。そのメンバーの中には健矢君は勿論、一年生の愁斗も入っていた。愁斗は健矢君の方に近づいていき、二人は親しそくに話をし出した。

（健矢君と愁斗って、仲良かったんだ。）

二人は先輩後輩という間柄だが、今の姿を見ると、とても信頼し合っているように感じられた。

（なんだかなあ・・・）

そんな二人を、私は複雑な思いで見つめる。

そして体育館に、試合開始のホイッスルが鳴り響いた。

第七話

「もう、すつごく格好良かった!」

月曜日のお昼休憩。水華と二人でお弁当を食べながら、私は昨日の練習試合の余熱も冷めないまま、健矢君の格好良さを熱く語っていた。そんな私を、水華は仕方がないといった感じで見つめてくる。呆れたような顔をしているものの、水華はしっかりと私の話を聞いてくれた。

「よかったねえ。」

「うん、うん!」

昨日の健矢君は、本当に格好良かった。相手のディフェンスを華麗にかわし、流れるようにシュートを決める姿。ゴールを決め、仲間と笑い合う姿。相手にゴールを入れられ、悔しそうにする姿。そのどれもがキラキラと輝き、とても素敵だったのだ。

「・・・それでね、水華。」

「うん?」

練習試合があった、その日の夜の事。私は一つの決心をしていた。

「私、健矢君に告白しようかと思ってるんだ。」

実を言うと、これは私の初恋で、私は初めて異性を好きになったのだ。健矢君を想う気持ちはどうどん溢れ、それが昨日の練習試合を観て、心に治まりきらなくなってしまった。

「そっか。」

私が告白に踏み切るとは、思っていなかったんだろう。水華は少し驚いているようだが、直ぐに賛成してくれた。

「そうと決まれば、早い方が良いわね。今日の放課後、告白しなさい。」

「えっ!? 今日?」

「そうよ。あんたの事だから、いつ気持ちが変わるか分ったもんじやないしね。今は昨日の練習試合の余熱で、気持ちも高ぶってるだ

ろうし。このままの流れで告白しちゃいな。」

確かに優柔不断な私は、いつ気持ちが変わるか分からない。明日になれば、告白しようとする気持ちも薄れているかもしれないのだ。それにしても今の水華、何故だかすごく活き活きとしている気がする。

「それじゃあ、今日の部活後にね。健矢には話しておくわ。」

話の展開が早い水華に呆気にとられるも、私は少しドキドキ始めている。告白なんて、何か女子高校生みたいだ。いや、実際に私は女子高校生なのだが。

色々考え過ぎて頭がパンクしそうな私だが、今まで活き活きとしていた水華の雰囲気、急に変わった事に気づく。不思議に思い水華の方を見ると、水華も静かに私を見つめてきた。先程の澀刺とした感じは、すっかりと無くなっている。

「・・・凜。」

「どうしたの？」

楽しそうにしている私を見て、水華が少し表情を曇らせる。

「ううん、何でもないわ。今、言うべき事じゃない。」

珍しく歯切れの悪い水華を不思議に思いながらも、私は初めての告白で胸がいっぱいだった。

そして放課後。私は、健矢君の部活が終わるのを教室で待っていた。水華には、練習を見ながら待つていればいいのと言われるも、愁斗と顔を合わせるのが嫌で断ったのだ。

放課後の教室には、部活動に精を出す生徒達の掛け声が響いてくる。夕日も差し込み、いつになく穏やかな時間だった。告白前というのが嘘みたいだ。

「おう、堺田。遅くなってゴメンな。」

告白前だというのに、のんびりとしていた私の所へ、ジャージ姿の健矢君が部活を終えてやって来た。健矢君の姿を見た途端、私の

心臓は凄い勢いで鳴り始める。やばい、凄く緊張してきた。

「水華から聞いたんだけど、俺に話があるんだって？」

「・・・うん。」

そう言つて健矢君は、私の方に近づいて来た。

「あのね・・・」

「どした？」

中々話を切り出さない私に、健矢君はイライラしたりせず、優しい笑みを浮かべてこちらを見つめてきた。もう、その仕草だけで格好良く見える。

中々煮え切らない私だったが、健矢君のその笑顔を見て、とうとう決心する。

「私ね、健矢君の事好きなんだ。」

それが、今私に出来る精一杯の告白だった。緊張し過ぎて、顔を上げられない。きつと今の私の顔は、驚くほどに真っ赤になっているだろう。

いつまで経つても健矢君からの返事は返って来ず、私は沈黙に耐え切れずに顔を上げた。健矢君は、とても驚いた顔をしていた。

「・・・堺田が、俺の事。全然気づかなかった。」

それは、そうだろう。私は愁斗と姉弟になつてからというものの、自分の気持ちを隠すのがとても上手くなったのだ。健矢君が気がつかなくても不思議ではない。しかしそう考えれば、私の気持ちに気づいてくれた水華は、本当に凄いと思う。私の事をよく見てくれているのだと実感し、とても嬉しくなった。

考えが少し脱線してしまつたが、今は健矢君の気持ちを知りたい。そう思つて健矢君を見ると、健矢君は少し困つたような顔をして私を見てきた。嫌な予感がする。

「・・・ゴメン。」

「・・・そつか。」

駄目だった。先程の健矢君の困っている様子を見た瞬間、そうではないかと思つたのだ。

断られる覚悟で告白したので、それ程落ち込む事はなかったが、少し悲しかった。しかし自分の気持ちを隠す事が上手かった私がコロコロと表情を変え、更に好きだという気持ちを相手に伝える事が出来た。初恋が成就しなかった事は悲しいが、私は少し誇らしく晴々とした気持ちになったのだ。

健矢君の次の言葉を聞くまでは。

「・・・うん、何て言うのかなあ。愁斗。あいつの姉だと思うと、なんかそういう事考えられないかも。悪い。」

頭の中が真っ白になった。健矢君は今、何て言ったのだろう。愁斗？何故、今此処で愁斗の名前が出てくるの？サーっと、血の気が引いていくのが分かる。気分が悪い、吐きそうだ。

どんどん顔色が悪くなっていく私を見て、健矢君は少し慌て出す。「いや違う！愁斗は関係ない。堺田は本当に良い子だと思うよ。一緒に居て、すごく楽しいし。でも恋愛対象としては見れない・・・ゴメン。」

健矢君は必死にフォローするも、一度放った言葉は取り消せない。先程の健矢君の言葉は、私の心に深く突き刺さっていた。

「・・・うつん、いいよ。気にしてない。突然ゴメンね。」

確かに傷付きはしたが、私は健矢君を責めなかった。きつと、慣れてしまっているのだ。私の心の中では、またかという文字が浮かび上がっていた。

「それじゃあね。呼び出しなんかしたりしてゴメンね。」

「・・・ああ。」

健矢君の顔を見ていられず、私は逃げるようにして教室から出た。泣きたいのに、涙は出てこない。諦めに似た感情が、私の心の中を渦巻いていた。

暫らく歩いていると、見慣れた人影が目の前に立っていた。先程

の私達のやり取りを見ていたのだろうか。其処には、悲しそうな顔を
をした水華が立っていた。

私は水華に抱き付いた。水華は何も言わずに、私を抱きしめ返して
くれた。

第七話（後書き）

ここまで読んで下さって、ありがとうございます。

回想シーン、予想以上に長引いております。もう少し、お付き合い下さい。

第八話

あれから暫らくの間、水華は私を抱きしめてくれていた。健矢君の事は本当にショックだったが、こうして水華は私を心配して待っていてくれたのだ。そんな掛け替えのない親友に、私は感謝の気持ちで胸がいっぱいだった。

「ゴメンね。」

私は、ゆつくりと水華の腕の中から離れる。

「・・・大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ。」

水華は悲しそうな顔で、私を見ていた。すごく心配してくれているのが分かる。私の所為で水華にこんな表情をさせているのだと思うと、申し訳なく思う半面嬉しくもあった。

「ありがとう、水華。水華が居てくれて、本当に良かった。」

愁斗抜きで、私の親友になってくれた水華。彼女がいなければ今頃私は、本当の意味で笑う事が出来なくなっていたかもしれない。きっと表面だけで笑っていて、内面ではいつも泣いていただろう。彼女のお陰で、こうして辛い目にあつても笑っていられる。本当にありがとう、水華。

「・・・・・・」

「水華？」

水華は突然私から顔を背け、そして俯いてしまった。思わず顔を覗き込むと、水華は歯を食いしばって何かに耐えているようだった。一体、どうしたというのだろう。

「みず・・・」

「凜、聞いて欲しい事があるの。」

いきなり顔を上げた水華が、私の言葉を遮りそう言った。その真剣な表情に、私は思わず息を飲む。物凄く、切羽詰っているような感じだ。

「・・・何？」

「こんな事、今のあんたに言うべきじゃない。でもどうしてか分からないけど、今言わなきゃもう一生言えなくなるような気がして・・・」

そこで水華は一端言葉を区切って、私の両手をギュツと握ってき
た。水華の手は酷く冷たく、そして小さく震えているのが分った。
「これはきっと私の自己満足。早く言ってしまつて、楽になりたい
だけなのかもしれない。許してとは言えないけど、最後まで聞いて
欲しい。」

何だろう。先程から胸がザワザワする。まるで耳の横に心臓があ
るかのように、私の心臓は大きな鼓動を立て始めた。それは警告音
のように、私の頭の中に響き渡る。これから聞くであろう話の内容
を、まるで聞こえなくするかのように。

水華は酷く緊張しているようだったが、ゆっくりと息を吐くとそ
のまま話し出した。

「私、高校で凜に会う前から、愁斗の事知ってたの。」

頭の中が真っ白になった。水華は何と言ったのだろう。知ってい
た？私に出会う前から、愁斗を知っていたと言うの？どうして。

「私、中学の時もバスケット部のマネージャーをしてね。愁斗は中学
のバスケット界じゃ有名だったから。でも初めて会ったのは、中学最後
の引退試合の時。私の中学は、あなた達の中学と対戦する事になっ
たの。」

水華は目を細め、少し懐かしむような顔をしていた。

「・・・一目惚れだった。私の中学のバスケット部は、殆んど愁斗一人
にやられちゃって。試合に負けて悲しまなければならなかったのに、
愁斗は本当に格好良くて、私は一人見惚れてた。」

話を聞いていく内に、私は段々と水華の顔が見れなくなっていっ
た。手の震えが止まらず、再び血の気が引いていくのが分かる。

「その時は声を掛ける事も出来なくて、愁斗はそのまま帰っちゃったんだけどね。そしてそれから、ずっと会う事もなかった。」

そう言って水華は、少し寂しそうな悲しそうな顔をしていた。

「そして高校の入学式、凜と出会った。ただ苗字が一緒なだけだろうと思ってたんだけど、愁斗に義姉が出来た事は噂で聞いていたから。気になって、凜と同じ中学の子に聞いたの。そしたら、あなたは本当に愁斗の義姉だった。」

目の前が真っ暗になっていく。これ以上は聞いてはいけない。もう一人の私が、必死に頭の中でそう言っていた。もしかして、私に近づいたのは……

「正直に言う。最初は……」

これ以上は駄目だと思うのに、体が動かない。耳を塞ぎたくとも塞げない。逃げようとするも、足が床に縫い付けられているみたいに動けない。嫌だ、聞きたくない！

「凜には……愁斗に会えるかもしれないと思ったから近づいた。」

胸が痛い。まるでナイフで切り刻まれているかのような。ズキズキと痛み出し、ギュツと胸を押さえる。立っているのが辛く、目眩もしてきた。先程の水華の言葉は、私の心を深く抉り取った。

「でも、本当に最初だけなの。今では愁斗の事、好きでもないし。

凜の事、私は本当の親友だと思っ……」

本当に、もう限界だった。水華が全てを言い切る前に、私はギュツと握りしめられている両手を振り払った。私も水華も、少しよるめく。もう何も考えられなかった。

「凜？」

水華は傷付いた顔をしていた。そして、こちらを伺うかのように見つめてくる。

「触らないで！」

再びこちらに伸ばされた手を、私は思い切り振り払う。乾いた音

が、辺りに響き渡った。

「凜、お願い！最後まで話を聞いて！」

「嫌、嫌っ！」

水華の悲痛な懇願さえ聞かず、私は水華に背を向けて走り出した。後ろから私を呼ぶ水華の声が聞こえてくるも、私は振り返る事無く走り続けた。

もう嫌だ！私に会う前から、水華は愁斗を知ってたんだ。私には、愁斗が目的で近づいてきたんだ。

——隣座って良い？堺田・・・凜って言うの？私は宮野水華。よろしくね。——

信じてたのに。水華は他の人達とは違う。愁斗抜きで、私に興味を持つてくれたのだと思っていたのに。他愛のない会話、笑い声、安らげる雰囲気、一緒になって悲しんでくれる瞳、楽しかった高校生活、それが全部嘘だったなんて。

息が苦しくなり、呼吸も酷くなってきた。もう出る事はないと思っていた涙が、どんどん溢れてくる。それ程私は、水華の裏切りに傷付いていた。

溢れる涙を拭いながら、私の脳裏には、ある人が浮かび上がっていた。

——凜ちゃんが居てくれれば、お母さんは他には何もいらぬのよ。

（お母さん！）

私だけを見ってくれるであろう唯一の肉親の母に、今すぐ会いたかった。今すぐ抱きしめて欲しかった。その温かい温もりに、今すぐ触れたかった。

私は走り続けた。息が苦しく喘鳴も酷くなるが、私は立ち止まる

事無く家に向かって走り続けた。

第九話

家に到着した私は息を整える為、玄関先で少し立ち止まった。この時間、きつと母は家に居るだろう。乱れていた息が整い始め、玄関に駆け寄りドアを開けようとした時だった。何か途轍もなく、嫌な予感がしたのだ。私はそつとドアを開けた。小さく開いたドアの隙間に体を滑り込ませ、そして静かにドアを閉める。リビングから話し声が聞こえてきた。私は足音を立てないように、リビングに近づいていった。中の様子を伺うと、リビングでは母と愁斗がいた。二人は楽しそうに話をしている。

「そう、すごいわねえ。」

母の感嘆の声が聞こえてきた。どうやら二人は、一枚の紙切れを覗き込んでいるようだ。あの紙切れには見覚えがあった。以前貰った中間テストの結果の紙だ。随分と前に貰った筈だが、愁斗はまだ見せていなかったのか。

「一位なんて、そう簡単に取りれるものじゃないわよ。」

愁斗は、やはり一位だったのか。私の高校はお世辞にも、それほど頭の良い高校ではない。頭の良い愁斗がうちの高校に来た時点で、一位を取るのは当然の結果と言っていいたろう。

「凜は頑張っても、三十位くらいしか取れないから。」

嫌な感じがする。再び胸が、ザワザワと騒ぎ始めてきた。今すぐ、この場から離れたほうが良い。咄嗟に頭の中でそう判断し、私は静かにその場を離れようとした。しかし、それは失敗に終わる。何故なら私は、次の母の言葉を聞いてしまったのだ。

「愁斗は、本当に偉いわねえ。愁斗みたいな子のお母さんになれて、本当に嬉しいわ。」

ドサッ

持っていた鞆が、私の手の中から滑り落ちる。その音に気づいた二人が、こちらを振り返った。

「あら凜ちゃん、おかえりなさい。」

母は、いつも通りの優しい笑顔で私を出迎えてくれた。きっと母にとつて、先程の言葉は、何の意味も持たない何気ない一言でしかないのだろう。その言葉に私が酷く傷付いたなんて、微塵も気づいてはいない。

「・・・姉ちゃん。」

それに比べ、愁斗はとても驚いた顔をしていた。そして、少しバツの悪そうな顔をする。愁斗は気づいているのだ。私が、先程の母の言葉に酷く傷付いた事を。

「ああ、ああ。」

もう限界だった。二人の顔を見ていられず、私は二人に背を向けて勢い良く家を飛び出した。背後で私を呼ぶ母の声が聞こえてきたが、私は立ち止まる事が出来なかった。

唯一の肉親の母でさえ、愁斗を選ぶのか。母に、そんな気はないのかもしれない。私を凄く大切にしてくれている事くらい分かる。しかし健矢君や水華の事があった私は、そんな事を考える余裕もなかった。健矢君や水華でさえ、きっと少なからず愁斗抜きで私の事を見てくれていたに違いない。それでも許せなかったのだ。愚かな私は、些細な裏切りさえ許せなかった。

一体いつからだだろうか。義弟を疎ましく感じるようになったのは私の心の中は、醜い感情で溢れかえっている。涙が溢れ目の前が霞む。今日は、もうずっと胸が痛い。このまま張り裂けてしまいたいそうだ。

いつの間にか振り出した雨が、私の行く手を阻む。しかし私は、濡れる事も構わずに走り続けた。何処に向かっているのかさえ分からない。暗い迷路にでも迷い込んだみたいだ。もう嫌だ、誰か助けて！

「姉ちゃん！」

急に腕を掴まれ、私は後ろに引つ張られるようにして立ち止まった。振り返ると其処には、私を追い掛けてきたであろう愁斗が居た。愁斗も雨に濡れ、全身びしょ濡れだった。私は酷く息を切らしているのに、目の前の愁斗は少しも息を乱していない。そんな事にさえ、私の心には黒い気持ちが生える。

「・・・帰ろう。母さんが心配してたよ。」

そう言つて愁斗はこちらに手を伸ばしてくるも、私はその手を振り払った。

愁斗は、全てに気が付いているのだ。私が愁斗に劣等感を持っている事も、私の周りには愁斗目当ての人達しか集まらない事も、私が愁斗に母を取られるのを恐れている事も。その全てを知った上で、こうして私に手を差し出してくる。それが癪に障った。

「・・・嫌い。」

私の言葉に、愁斗は端正な顔を強張らせる。

「あんたなんか嫌い。大っ嫌い！あんたは私から何もかも奪つていった！好きな人も、親友も・・・たった一人の家族さえも。」

健矢君、水華、お母さん、私の大好きな人達。その全てをあつさりと奪つていった愁斗に対して、私は溢れ出す言葉を止める事が出来なかった。

「あんたさえ、あんたさえ居なければ！」

愁斗の顔を見る事も出来ず、私は俯いたまま怒鳴り散らした。愁斗が、どのような顔をしているのかも分からない。

辺り一面薄暗くなり、雨はどんどんと酷くなつていった。絶望の淵に立っていた私には、もう雨の音しか聞こえなかった。

「・・・違う。愁斗じゃない。」

私は、ふと気が付く。愁斗は皆から必要とされている。皆が愁斗を必要している。健矢君も、水華も、母も。誰からも必要とされて

いる愁斗。愁斗とは対照的な私。何故こんな簡単な事に気が付かなかったのだろうか。そうか、そうだったんだ。

「・・・居なくなった方が良いのは、私だったんだ。」

その時だった。私の背後の空間が、急にざわついたのが分かった。それを肌で感じ取った私は、後ろを振り返る。すると其処には真っ黒で大きな、まるでブラックホールのような空間が現れていた。私の周りの風が急に強くなる。

「凜っ！」

一瞬の出来事だった。風が私を連れて行く。私はそのブラックホールに、いとも簡単に吸い込まれてしまったのだ。

私が最後に見た景色は、驚愕の顔をした愁斗が、必死になって私の方に手を伸ばしている姿だった。

第九話（後書き）

回想シーン、ようやく終わりました。

何やらもの凄く暗いお話になっていますが、これからもう少し明るくしていく予定です。

第十話

恐怖に怯える目。食い千切られる肉。苦痛の絶叫。血で赤く染まった体。生きたいと、こちらに伸ばされた手。動かなくなつた命。「何故、助けてくれなかつた？」

目の前で横たわっていた男が静に目を開け、憎悪に満ちた目で私を見てくる。その視線に射貫かれ、私は一步も動けなかつた。

「はっ。」

嫌な夢を見て、私は跳び起きた。全身汗だくで気持ちが悪い。

「こ、此処は・・・」

辺りを見回すと其処は見覚えのない部屋で、私はその部屋にあるベットのの上に寝かされていた。木で出来た簡易な作りの部屋に、少し不安を覚える。心なしか、僅かに揺れているようだ。ベットも硬く、背骨が痛い。

どうして、このような場所で眠っていたのだろうか。

（確かブラックホールのようなものに吸い込まれて・・・）

最後に覚えているのは、愁斗の顔。必死にこちらに手を伸ばしていた。愁斗はどうなつたのだろう。私と一緒に、あのブラックホールに吸い込まれたのだろうか。そうだとすると、愁斗も近くに・・・もつと良く思い出そうとしたその時、突然私を吐き気が襲つた。

「うっ！ゴホッゴホ。」

私は口元を押さえ、大きく咳き込んだ。胃液が逆流し、咽喉がイガイガする。

（そうだ、私・・・）

森の中で出会つた男の人。私は彼を助ける事が出来なかつたのだ。あの人は私に助けを求めてきたというのに、私は足が竦んで動く事が出来なかつた。

（見殺しにした。）

最悪の事実に、私は呆然とする。私が殺したようなものだ。今まで死と何の関係もなく平和に過ごしてきた私にとって、その事実はとても耐え難いものだった。

此処は私の住んでいた世界じゃない。私の住んでいた世界にも戦争などの悲惨な出来事は存在するが、あのような恐ろしい狂気は存在しない筈だ。私はきっと、異世界に来てしまったんだ。

動悸や震えが治まらず膝を抱えて蹲っていると、この部屋に一つしかない古びた扉が、錆び付いた嫌な音を鳴らしてゆっくりと開いた。突然の事に驚き、私は咄嗟に身構える。

「目が覚めたのか。」

私は絶望の中に居たにも係らず、思わず息を飲んで見惚れてしまった。銀髪に蒼い目。まるで森の中で出会った、あの狼のような男が入り口に立っていたのだ。襟足だけが少しだけ長い髪を緩く縛り、肩に垂らしている。白いシャツにブーツインした茶色のズボンを穿いており、腰にある大きな黒いベルトには短剣が差されていた。その体にはしなやかな筋肉が付いており、綺麗な銀髪や蒼い目と合わせる、その様は美しくもあり悠然としていた。

男はベットの傍にある椅子に腰を落とすと、ジッと私を見てくる。

「あ、あなたは？」

私はその視線に耐え切れず、質問を試みた。そんなに見ないでほしい。

「俺はセイン。このジルヴァリユコス号の船長だ。」

じる・・・何だって？長く難しい名前に首を傾げる。とりあえず、男の名前がセインだという事は分かった。男の名前だけでも分かれば充分だろう。そんな私の様子を、セインは怪訝そうに見ている。

「という事は、此処は船の中なの？」

「そうだ。」

船の中。揺れているような感じはしていたが、まさか本当に揺れていたとは。すると此処は、狼に連れて来られた砂浜から見た船

の中という事だろう。あの船に助けられたのだろうか。それでは狼は何処に行ったのだろうか。そんな事を色々と考えていると、今度はセインの方から質問してきた。

「お前の名は？」

「・・・凜です。」

正直に答えるべきか迷ったが、名前くらい別にいいだろうと考え素直に答えた。

「リン・・・か。」

「はい。」

セインは確かめるかのように、私の名前を何度か繰り返して呟いていた。

異世界に来たかもしれないという事実には絶望していた私だが、彼に名前を呼ばれた事でその気持ちが少し和らいだ。名前を呼ばれた事で、私を知ってくれている人がいると実感したからだ。名前の力って凄い。

「何故、あの場所に居た？」

あの場所とは浜辺の事だろうか。セインの質問に、私は少し固まる。果たして、本当の事を言っただけで信じてもらえるのだろうか。ブラックホールに飲み込まれ、気づけば森の中。薄々此処が地球でない事は分かっていたが、目の前のセインという男を見てそれが確信に変わった。こんな雰囲気の間人は、地球にはいない。それでは、やはり此処は異世界という事になる。

何の返答もない私に、セインは再び怪訝そうな目を向けてくる。

「ヤバイ、何か答えないと。」

「わ、分からないんです。気が付いたら森の中に居て。変な人達に襲われたのを銀色の狼が助けてくれて、それであの浜辺に連れて来られて・・・それから意識が無くなって。」

支離滅裂になりながらも、何とか答える。ブラックホールの事は伏せておいた。知っている人が誰一人として居ないこの世界で、最早頼れるのは目の前のセインだけだ。悪意があるようには見えない

し、私を拾ってくれたという事は、少なからず私を助けようとしてくれている筈。異世界から来ただなんて、頭の可笑しな人間とは思われたくない。そうだ、記憶喪失という設定にしよう。

異世界から来たという事だけは絶対に言うまいと密かに心に決めた私だが、セインの次の言葉でそれは呆気なく崩れ去った。

「おまえは、この世界に人間じゃないな。」

第十一話

「え・・・」

セインの言葉に、私は思わず呆ける。どうして分かったのか。そんなに怪しい素振りは、見せていなかった筈だ。それともこの世界では、異世界からやって来る人間は珍しくないのだろうか。

私がオロオロと動揺していると、セインは呆れたように溜息を吐いた。

「何故分かったのかという反応だな。まず第一に、お前からは魔力を感じられない。この世界の人間には、少なからず魔力が生ずる。」

魔力という事は、この世界では魔法が使えるのか。魔法など存在しない平凡な世界に身を置いていた私が、魔力なんぞのファンタジーなものを所持していないのは当然である。

「黒髪と黒目が、その証拠だ。魔力の高さは、色素の薄さに比例する。魔力が高ければ高いほど髪や目の色素が薄く、逆に魔力が低ければ低いほど色素は濃くなる。しかし、魔力がゼロという事はない。つまりこの世界では、黒髪と黒目両方を持ち合わせている人間は存在しないという事だ。」

成る程。つまりこの世界では、黒髪黒目を持つ私の存在は異形という事になる。誰もが魔力を当たり前に持つこの世界で、魔力を持たないという事は、きつと役立たず以外の何者でもないのだろう。

この世界でも、必要とされない存在なのか。そんな事実に、私は自称気味に笑みが漏れた。

「それに、ジルヴァリユコス号の船長セイン。この世界で、この名を知らぬ者は居ない。俺が始めに名を名乗った時、おまえは何の反応も示さなかった。普通の者なら、驚愕の目で俺を見る筈だ。」

なんと、セインは有名人だったのか。そういえばセインが名を名乗った時、私は何の反応も示さなかった。そんな私を、セインは怪訝そうに見ていた気がする。あれは名が知れている自分を知らなか

った私に対して、不信感を持ったからか。セインの髪は、眩い銀髪だ。もしかすると彼は、この世界では有名な魔法使いなのかもしれない。

もう誤魔化しても仕方がない。そう考えた私は、セインに全てを話す事にした。此処とは違う世界で生きていた事も。突然ブラックホールに吸い込まれた事も。

「そうか。」

私の話を聞いたセインは、それ程驚いた様子もなく静かに私を見ていた。やはり魔法が当たり前のよう存在しているこの世界では、異世界から来た人間など珍しくないのだろうか。

不思議そうにしている私を見て、セインが苦笑を漏らす。

「異世界から来た人間など、恐らくお前が初めてだろう。だが、この世界には古くから言い伝えがあつてな・・・」

先程から私の考えている事が、セインに筒抜けになっている気がする。今まで思考が顔に出にくいと思っていたが、もしかするとそんな事はないのかもしれない。

そんな私の考えを余所に、セインは一端言葉を区切ると小さく息を吸い込んだ。

『この世界狂気に堕つる時、異界より黒髪黒目の乙女現る。彼の者皆の希望となりて、世界を平和に導かん。』

そう言い終えると、セインはこちらをジッと見つめてきた。

「・・・え、もしかして、それが私？」

突然の話に私は驚く。人違いではないのだろうか。私は、そんな大層な人間ではない。

「俺もそんな黴の生えた言い伝えなど、信じてはいなかったさ。だが現に、この世界が崩壊の危機に面している今、突如としておまえは現れた。」

「この世界は、崩壊の危機に面しているの？」

「おまえも見たであろう。あの狂気に狂った三人を。人は皆、奴等の事をインフェクターと呼ぶ。」

この世界は、崩壊の危機に面しているのか。それには、あの狂気に狂った三人組も関係しているらしい。インフェクター。そういえば、森の中で出会った男性・・・私が死なせてしまった男性が、何かを言っていた気がする。

——・・・では、ないのか？——

あれは、「インフェクター」では、ないのか？」と聞いていたのかもしれない。

これはあまりにも現実味がなく、また非日常的な話になっていく気がする。聞くのが少し恐い。しかしきつと、これらを知っていかなければ、元の世界に戻る方法もこれからすべき事も、何も分からないままなのだろう。

そんな私の思いを察してか、セインはゆっくりと話し出した。

「おまえには、知る必要があるのかもしれないな。良いだろう、話してやる。今、この世界が崩壊の危機に面している理由を・・・」

第十二話（前書き）

第十二話は物語の構想上、残酷な描写が入ります。苦手な方は読むのを控えて下さいね。

第十二話

世界で最も広大な海、ラティス海。その中心に位置する世界最大の規模を誇るエイス大陸には、ドーナ王国と呼ばれる大きな国があった。ドーナ王国は栄華繁栄を極め、世界各地に存在する国々を一国で纏め上げていた。

ドーナ王国こそ、世界の中心。それがこの世界の常識だった。

時は、魔術時代。

高度な魔術が次々と編み出され、人々の生活の中に取り込まれていった。魔術の質が上がる事によって、国が豊かになる時代だったのだ。

ドーナ王国が、栄華繁栄を極める事が出来たのには理由がある。ドーナ王国では英才教育による有能な魔術師の育成、高度な魔術研究、他国からの有能な魔術師の引き抜きにより、その力を強めていった。更にドーナ王国は、自国に牙を剥く国々をその魔術の力によって次々と薙ぎ倒していった。そうしてドーナ王国は、世界の支配者となったのだ。

ドーナ王国には、国王に仕え城に住まう王律魔術師がいた。その王律魔術師の最高責任者、ホームロ。彼は類い稀なる才能の持ち主で、彼に扱えぬ魔術は存在しない程だった。他国との戦争においては、ホームロ率いる王律魔術団が圧倒的な力で他国を捻じ伏せた。彼はドーナ王国の名を上げると同時に、また自身の名も瞬く間に世界に知らしめたのだ。

そんなホームロが、ある一時から自分の研究室に籠もりきりにな

った。彼はこうして度々研究室に籠もる事があつたので、城の皆も特には気にしなかった。またホームロによって新たな魔術が開発され、我々の国は豊かになる。そんな噂さえ流れ始めた。

ホームロが研究室に籠もってから、早半年。流石に人々は心配し始め、一人の侍女に様子を見に行かせた。ホームロは、研究室を覗かれる事を酷く嫌う。以前彼の研究室を覗いた重役が、彼の魔術によつて跡形もなく消え去つたのだ。これは言わば、ただの生贄。そして様子を見に行った侍女は、帰つて来なかった。

侍女が帰つて来なくなつてから、更に一ヶ月。城の誰もがもう待つしかないと考え始めたその頃、突如として侍女は帰つて来た。話しかけても返事は帰つて来ず、目は虚ろに虚空を見ている。誰が見ても、侍女の精神は崩壊していた。余程、恐ろしい目にあつたのだろう。そう考えた仲間の侍女が、彼女を休める場所に連れて行こうとしたその時だった。虚ろな目をしていた侍女が、いきなり仲間の侍女に噛み付いたのだ。誰もが目を睨り侍女を止めようとするも、侍女はその止めようとした者にまで噛み付き始めた。辺り一帯、騒然となる。そしてその場に居た皆が、ある事に気付いたのだ。

侍女が噛み付いているだけではなく、その噛み切つた肉を食べている事に。

結局、駆けつけた王律騎士団により侍女は斬殺。負傷した者は、医務室へと運ばれた。ホームロの魔術により侍女は正気を失つたのだと判断され、その問題は片付けられた。

そして、その日の夜。運命の夜。

皆寝静まり、ひっそりとした静かな城に何人もの悲鳴が響き渡つた。城に仕えている人間が次々と狂いだし、正気を保っている人間

を次々と襲い出したのだ。襲いくる人間達の中には、昼間負傷した者や更には死んだ筈の侍女まで居た。

辺り一面、狂気。血は噴き出し、人々の悲鳴が後を絶たない。狂気に狂った人間は、正気を保っている人間を次々と食べ始めた。王律魔術師、王律騎士団も事態の沈静に当たろうとしたが、その凄まじい勢いになすすべもなく後退した。

被害は城内に止まらず瞬く間に王都に広がり、そしてドーナ王国全体、また他国にまで広がっていった。その間、ホームロの姿を見た者は誰も居ない。

そして世界は、狂気に包まれた。

第十二話（後書き）

説明文ばかりで、読みにくいかもしれません（汗）

第十三話

「そういう事だ。」

セインの話を聞いて、私は愕然とする。私の住んでいた地球では、考えられないような話だ。

「噛まれた者は、次々と狂っていった。まるで傷口から菌が入り、感染していくかのように。奴等の事をインフェクターと呼ぶと言ったな。インフェクター、魔術用語で感染者という意味だ。」

感染者。その言葉を聞いた瞬間、私は何故だか体がゾクツとした。「そしてどういう訳かは知らないが、噛まれた傷口は暫らくすると瞬く間に治っていく。インフェクターになっってしまうと、どんなに傷を負っても直ぐに治癒してしまうのだ。」

そういえば森の中で出会ったインフェクター達は、泥だらけでみすばらしい格好をしていたものの、体に傷を負っているようには見えなかった。そして狼を目の前にしても、怯える事無く立ち向かって来るその様。恐ろしい、まさに不死身の狂気だ。

「ホームロは、一体侍女に何をしたの？」

「分からない。ホームロが侍女に、どのような魔術を施したのか。いや、ホームロが侍女に何かをしたという証拠もない。ただ、ホームロの部屋から帰ってきた侍女が、第一の感染源である事には違いない。あの惨劇以降ホームロの姿が見られない以上、彼はこの騒動に何らかの関わりがある筈だ。」

ホームロ、彼は一体何を考えていたのだろう。半年間も研究室に籠もり、何をしていたのか。

もしかしたら、ホームロもインフェクターになっている可能性はないのだろうか。そう思いセインに尋ねてみると、その可能性も捨てきれないと返ってきた。本当に謎だらけだ。

セインは小さく息を吐くと虚空を見つめ、少し懐かしむような顔をした。

「たった二年だ。城での感染が始まってから、たった二年で世界は狂気で包まれたのだ。」

二年。長いように感じられるが、二年で世界中に感染が広がるなんて、きつと相当な早さなのだろう。

「それじゃあ、みんな感染してしまったの？王様とかは？」

「国王は自害したそうだが、後継者に当たる第一王子は王律魔術団と王律騎士団を引き連れ、早々に海へ逃げた。奴等は民を捨てたのさ。」

酷い。自国の民を守らなければならない立場にある王族が、自らの可愛さ故にその民を見捨てて真っ先に逃げるだなんて。

「その後感染に気付いた民達も、各々海に逃げた。もちろん逃げ遅れた者が殆んどだが。」

人々は陸を捨て、海に出たのさ。」

「セインも？」

私がそう言うのと、セインは少しキョトンとした表情になった。そして急に下を向き、クツクツと笑い出す。私は何か、変な事でも言ったのだろうか。

「俺は最初から海にいたさ。海賊が陸にいちやあ、可笑しいだろう？」

セインの言葉を聞いて、私は固まる。セインは今、何て言った？海賊？海賊って、あの海の荒くれ者の？略奪強奪を繰り返す、あの海賊？

「か、か、海賊って・・・セインが？」

「そうだ・・・ああ、そういえばお前は何も知らぬのだったな。先程も言ったであろう。ジルヴァリユコス号の船長セイン。この世界で、この名を知らぬ者は居ない。俺は有名な海賊なのさ。」

そう言うのとセインはこちらをじつと見つめ、ドキツとするような笑みを送ってきた。私は、思わず顔を赤くする。そんな顔を見られたくなくて、私は誤魔化すかように下を向いた。

「そ、そんな、私てつきりセインは有名な魔法使いか何かかと・・・

「魔法使いか。あながち間違ってもない。俺は魔術師だ。この容姿の通り、魔力は強い方に当たる。」

こちらの世界では、あまり魔法使いという言い方はしないらしい。そしてやはり私の想像通り、セインの魔力は強いようだ。

まあ、そんな事はどうでもいい。まさか、セインが海賊だったとは。悪意はなさそうに見えたのに、私はどうなるのだろうか。疾しい奴等に、売り飛ばされてしまうのだろうか。それとも最悪の場合、殺されてしまったりするのだろうか。どうすればいい？ 今頃になって冷や汗が出てきた。

だんだんと青褪めていく私を見て、セインは何もかも見透かしているような微笑を浮かべた。

第十四話

頭の中で最悪の結末を想像をしながらアタフタとしていると、セインが可笑しそうに笑った。

「何を考えているのが、手に取るように分かるな。まあ、安心しろ。売り飛ばしたり殺したりはしない。」

そんなセインの言葉に、私はホッと息を吐く。よかった、酷い目に遭う事はなさそうだ。

それにしてもこちらの世界に来てから、本当に表情が豊かになった気がする。良い事だとは思うが、思考がバレバレなのは一体どうしたものだろうか。

「まあ本来ならば、この世界の救世主であろうと魔力も持たぬ、しかも何の取り柄もなさそうな小娘など捨て置くところだが・・・」

うつ、何やら途轍もなく恐ろしい言葉が聞こえてきた気がするのだが、気の所為であろうか。

「もし陸の奴等の手にでも渡ったら、それはそれで面白くない。」

そう言ったセインは、本当に可笑しそうに笑っていた。

「今頃陸の奴等は、血眼になっておまえを探している筈だ。奴等は、海での生活に慣れていない。一刻も早く、陸に帰りたい筈だ。しかし、陸には帰れない。何故ならインフェクター達が、ウヨウヨと待ち構えているからだ。そうなると、奴等に残されたのは最後の希望しかない。黴の生えた言い伝えであろうと、世界を救ってくれるというおまえの存在を信じるしかないだろう？」

そう言々とセインは椅子から立ち上がり、ベット上に座っている私の方に身を乗り出してきた。急な事に驚き思わず私は後ずさるうとするも、セインはそれよりも早くこちらに手を伸ばしてくる。

「うわっ！」

急な浮遊感と共に、私の体は高く持ち上げられた。気が付くと、お腹と太腿に温かい感触が。なんと私は、セインの右肩に荷物のよ

うに担がれていたのだ。

「ちょ、降ろしてよ！」

私はセインの背中を叩いて暴れるも、セインは特に気にした様子もなくドアの方へと歩いて行った。私が暴れている間にも、セインは部屋を出て薄暗い通路を歩いて行く。一体、何処に連れて行かれるのだろうか。奴隷部屋が何かだろうか。この前見た映画の内容を思い出し、私は青褪めた。きっと、死ぬまで扱き使われるんだ。それともやはり、海賊達に酷い目に遭わされるとか。

どうしようもない現実に、私は涙が止まらなかった。

一人絶望していると、急に視界が開けた。どうやら、船の甲板に上がったらしい。雲一つ無い青い空に差し込む太陽の光が眩しくて、私は目を細める。甲板から見えた青い海は何処までも続いている、太陽の光に反射しキラキラと輝いていた。

（綺麗。）

美しい景色に思わず見惚れていた私だったが、辺りに響き渡ったセインの声により我に返った。

「聞け、皆の者！我が船に、異界より黒髪黒目の使者がやって来た。陸の奴等は、血眼になってこの者を探している筈だ。」

そう言々とセインは、私の太腿を軽く撫でてきた。ちょ、何すんの！セクハラ反対！

一人焦る私を余所に、セインは続ける。

「陸の奴等に渡すのは、面白くないだろう。奴等には渡すまい。ドーナ王国の連中に、一泡噴かせてやろうぞ！」

セインがそう言くと、辺りに地響きのような歓声が沸き上がった。セインに後ろ向きに担がれている私は、前方の様子を伺う事が出来ない。一体、何が起きているのだ。

首だけを後ろに向け前を見ようとしたその時、急にセインによって彼の右腕に座らされるかのように抱え直されたのだ。

「のわっ！」

思わず、変な声が出る。せめて一声掛けてから、抱え直してほしい。

そう抗議しようしてセインに顔を向けた瞬間、私は固まった。想像以上に、セインの顔が近くにあったからだ。こんな美形に間近で見つめられて、赤面しない女はいるのだろうか。いや、いない。

赤面した事が悔しくて、私はセインから顔を背けるようにして辺りを見渡した。すると其処には、如何にも海賊って顔をした人達がゴロゴロと居て、その全員が私の方を食い入るように見ている。

（恐っ！）

敵つい人達の視線に恐れをなして、私はセインに視線を戻す。そして思わず、縋るようにして彼のシャツをギュツと握り締めてしまった。そんな私をセインが可笑しそうに見ている。

「運が良かったな。この船に置いてやろう。別に、酷い目には遭わさぬさ。」

そう言うときセインは、私の耳元に唇を寄せてきた。突然の事に驚き思わず仰け反ろうとするも、それはセインの手によって引き戻される。

私の耳にセインの唇が触れ、私はギュツと目を瞑った。

「可愛がつてやろう、リン。」

そう耳元で囁かれ、私の心臓は激しく鼓動し始めた。私の耳元から唇を離れたセインは、妖艶に笑い私を見ってくる。私は視線に囚われ、彼から目を逸らす事が出来なかった。

第十四話（後書き）

ようやく、異世界での恋愛要素が入ってきた気がします。

第十五話

あれから私はセインによって、お風呂場らしき所に連れて来られていた。この世界の服も渡され、そのみずばらしい格好を何とかしてこいとまで言われた。ひどい！確かに今着ている学校の制服は泥だらけでボロボロだが、好きでこうなった訳ではないのに。

まあしかし、折角お風呂を使わせてくれるというのだから、ありがたく使わせてもらおうとしよう。まさか船の中に、お風呂があるとは思いもしなかった。甲板に居た時も思ったが、この船はすごく大きい気がする。流石は、有名な海賊達の船である。

果たしてどのようなお風呂なのか気になった私は、ワクワクしながらお風呂場を覗いてみる事にした。そして、その中の光景に驚愕する。

「セ、セイン！」

「・・・どうした。」

外で待っていると言って出て行くこうとしていたセインに、私は慌てて声を掛けた。あ、少し面倒くさそうな顔をしている。

「ちよつと来て！」

そんなセインにめげる事なく、私は彼の腕を引っ張った。面倒くさそうな顔をしていたセインであったが、自分の腕を引っ張って離さない私を見て妖しく笑い出した。

「何だ。一緒に入って欲しいのか？」

「ち、違います！」

セインの言葉に、私は顔を赤くしながら必死に否定した。破廉恥な事を言うのは禁止！

一端深呼吸をして気を取り直してから、私は驚愕の理由を精一杯伝えた。

「あのね、空中に石が浮かんでるんだけど！」

「は？」

そう言った私に、セインは呆れたような声を出した。しかし必死な様子の私を見て、何かを考えるような素振りを見せる。

「そついえばおまえは、この世界を全く知らぬ言わば赤子同然のような存在であつたな。」

そう言うつとセインは、空中でフヨフヨと浮かんでいる石に手をかざした。石が光ったと思つた次の瞬間、天井に取り付けられているシャワーヘッドのような物から勢い良くお湯が吹き出てきたのだ。「わっ！」

突然お湯が出てきた事に、私は驚きの声を上げる。

「これはクオーツと呼ばれる鉱物の一種で、魔術との相性が良い石だ。まずこの石に魔術を施し、そして魔力を吹き込んで魔力を蓄えておく。そうして出来たクオーツは誰でも使用する事が出来き、魔力の弱い者でも少量の魔力で楽に魔術を行う事が出来る。魔力の強い者でも直に魔術を行えば魔力の消費量は激しいが、クオーツを媒介にする事によってその魔力の消費量を抑える事も出来る。」

難しい。難しいが、とにかくファンタジーの世界である事には間違いない。

「我々は、クオーツを日常生活の中に取り入れ生活している。クオーツに魔術を施したり、魔力を吹き込む事を生業としている者も居るほどだ。クオーツが無ければ、今頃我々の生活はとても不便なものになつていただろう。」

そしてこの世界では、クオーツは無くてはならない物らしい。

「例えばこの浮かんでいるクオーツには、海から海水を引き上げる引力の魔術が施されている。海水が通つてくる配管の途中に、海水を真水に代える水の魔術、冷たい水を暖める火の魔術が施されたクオーツが設置されており、それら全てのクオーツが作用してこうして湯が出てくるという訳だ。」

魔術といつても、ただ便利で都合の良いものではないようだ。ポンと呪文を唱えると、ポンと何かが起きる。この場合、お湯が出てくるといふ事だが。そんなイメージを持っていた私は、少々驚いた。

ちゃんとした原理や法則があるようだ。

「でもこれって、私が使えるの？」

少量の魔力で楽に魔術を行う事が出来るとは言っていたが、その少量の魔力さえ持ち合わせていない私にはクォーツを使う事が出来ないんじゃないか……

「ああ、魔力の全く無いおまえにはクォーツを使用する事は出来ない。クォーツを使用するには、少なからず魔力が必要になってくる……そうだな、おまえがクォーツに触れる事によって、魔術が発動するようにしておいてやろう。」

そう言うときセインは再びクォーツに手をかざし、そして小さく呪文のようなものを唱えた。石が呪文に呼応し、小さく光る。

「これで、大丈夫なの？」

あまりにも呆気ない感じで、少々不安を覚える。

「ああ。おまえがクォーツに触れる事によって、魔術が発動する。魔力に関しては、クォーツに蓄えられている魔力を全て使用する事になる。面倒だが、この船の他のクォーツもそうしといてやろう。」

先程から面倒くさそうな顔ばかりしているセインに対して、私は小さく頭垂れる。うう、なんかもう本当に何もかもすみません。

やはり異世界では、色々と勝手が違うようだ。クォーツに関して、凄く難しいし……果たして私は、本当にこの世界でやっていけるのだろうか。凄く不安だ。まあしかし、やっていくしかないのだろう。私には、他の選択肢など無いのだから。一度は、何もかも失った私だ。そしてこの世界でも、失う物なんて何一つ無い。一から頑張ると思えば良いんだ。そうだ、生まれ変わったと思えば良い。やってやろうじゃないか、私！

「不安なら、一緒に入ってやるが？」

「結構です！」

……本当に大丈夫なんだろうか、私。

第十六話

海賊船のお風呂は、なんと猫足のバスタブだった。海賊に猫足のバスタブ！ 敵つい海賊達がこの可愛らしいお風呂に入っているのを想像して、噴き出しそうになった事実は一端隅っこに置いておこう。あれから私はお風呂に浸かりながら、これまでの事を振り返っていた。健矢君や水華、母の本音に触れ一人で勝手に絶望し、そして愁斗に酷い言葉を浴びせこの世界に飛ばされてきた。

——今日は、普通に学校に行つて、普通に授業を受けて、普通に友達と会話して、普通に……——

なんだ、全然普通なんかじゃなかった。全てが普通じゃない一日だった。狂気に狂つた三人組には追い掛けられ、食い殺されそうにもなった。運良く狼に助けられこの海賊船に拾われたものの、本当に酷い目に合った。いや、当然の報いなのかもしれない。一人で勝手に絶望して、何も悪くない愁斗に酷い言葉を浴びせ傷つけた。きっと、その罰を受けたに違いない。

今頃、愁斗はどうしているのだろう。こんな私を助けようと必死に手を伸ばしてくれていたので、愁斗もあのブラックホールに吸い込まれている可能性がある。そんな事をぼんやりと考えていた私は、突如ハツとした。愁斗にあんなにも酷い事を言つて突き放しておいたくせに、今ではもう愁斗に会いたくて仕方がない。そんな自分勝手な考えに嫌気がさし、私はバシャッと顔までお湯に浸かった。

（このままお湯に溶けて、無くなつてしまえばいいのに。）

そんな事を考えながら、私はギュッと目を瞑った。

お風呂から出た私は、セインに連れられ船内を歩いていた。ちな

みに渡された服は、クリーム色のロンTのような服とベルトで留める形の茶色の巻きスカート、そして茶色のブーツだった。このロンTのような服だが、襟切りが非常に広く両肩が丸見えになってしまふ為、これまた黒色のタンクトップのようなものを貰って中に重ね着する事にした。着ていた制服はお風呂場で洗わせてもらい、今では手に持っている。洗っても汚れが落ちずボロボロであつたが、元居た世界の唯一の品である為に手放す事が躊躇されたのだ。後で、干させてもらおう。

セインに連れられ着いた場所は、彼の部屋だった。椅子に座らせれ少し落ち着いたところに、突如セインから爆弾発言が落とされる。「今日から此処で寝ろ。」

「はい!？」

私は思わず声を上げた。何故セインと同じ部屋なのか。若い男女が同じ部屋というのは、色々和不味いのではないだろうか。

「別に他の部屋でも構わぬさ。ただ一つ忠告しておくが、此処は海賊船。普通の女など、一人も乗り合わせてはいない。当然だが、女に飢えている奴等が殆んどだ。それでも良いなら、他の部屋を案内しよう。何があつても責任は取らぬ。」

「こ、此処が良いです！是非、此処に居させて下さい！」

セインのさり気ない脅しに、私は多いに怯えた。うう、海賊って怖い。

それにしてもセインの部屋が良いと言ってしまったものの、果たして彼は大丈夫なんだろうか。彼も男な訳で、危険でないとは言いが切れない。甲板では可愛がつてやろうなんて言われてしまったし、彼に襲われるという可能性も・・・

ビクビクしながらセインを見上げると、そんな私の考えを見透かすかのように彼は呆れたように鼻で笑った

「安心しろ。おまえのような色気の欠片もないような女に欲情するほど、落ちぶれてはいない。」

酷っ！なんか悔しい。襲われないと断言されて安心して良い筈だが、

何故だか素直に喜べない。喜んで良いのやら悪いのやら。

「まあ必要とあらば、相手をしてやらない事もない。」

セインの言葉に、私は思い切り赤面する。もう本当に勘弁して下さい！セインと居ると、とてもじゃないが心臓がいくつ有っても足りそうにない。

妖艶な笑みを浮かべてくるセインから顔を背け、私は虚空を仰ぎそして頂垂れた。

第十七話（前書き）

少しR15的な表現が入りますので、苦手な方は注意して下さい。

第十七話

その日の夜、セインの海賊船では、甲板にて宴が開かれる事となった。私もその宴に参加するように言われ、緊張の面持ちで甲板へと上がって行ったのだが、甲板に出た瞬間に別の事に気を取られてしまいそれどころではなくなった。夜空が凄く綺麗なのだ。満天の星空。隙間無くと言って良いほど、夜空を埋め尽くす星達。大きな月のような星もあるし、月より小さな、しかし他の星達よりも大きな星も三つ程ある。夜の筈なのに、星のお陰で辺りは明るい。

「夜空ばかり見ているのだな。」

星空に目を奪われていた私に、隣に座っていたセインがそう言うて話し掛けてきた。

「だって、すっごく綺麗なんだもん！」

「普通だと思うが？」

セインは普通だと言うが、日本では考えられない事だ。本当に美しい。この世界が崩壊の危機に面しているだなんて、信じられないくらいだ。

「周りにこんなにも男前が揃っているというのに、全く見向きもしないなんてねえ、船長。」

そう言うて私達の話に入ってきたのは、ほんの少し長めの金髪に、黒い瞳をした男だった。アクセサリーを沢山付けており、少しチャラチャラとした印象である。

誰だろう。セインの周りには、側近というか、幹部クラスっぽい人達が集まっているようだ。何故分かるのかというと、他の人達とオーラが全然違うのだ。身なりもしっかりとしているし、下っ端っぽい人達は不潔とまではいかないが少々だらしないように感じられる。

あまりにもまじまじと見過ぎた所為であろうか。私の視線に気づいた金髪男が、ヘラッと笑いながらこちらに近づいて来た。

「初めまして、異界の乙女。俺はロディ、よろしくね。」

「よ、よろしく。」

そう言っただけで馴れ馴れしく肩を抱いてくるロディに、私は思わず逃げ腰になる。この人、絶対に女慣れしている。そんな逃げ腰の私を見て、ロディがニヤニヤと笑い出した。

「お、いいねえ、その初々しい反応。」

そう言いながら、ロディは面白がるかのように更に体を密着させてきた。この男、さては私の反応を見て楽しんでいるな？彼の体を必死に押し返していると、近くからまた別の声が掛かった。

「ロディ、あまりからかってやるな。」

ロディの過剰なスキンシップを止めてくれたのは、無造作に後ろに流したオールバックの茶髪に、緑の瞳をした男だった。ロディに比べ大分年を取っている感じで、まさにダンディなオジサマといった感じである。この人も幹部クラスのようなのだ。

「俺はイストだ。よろしくな、嬢ちゃん。」

そう言うといストは、大人の落ち着いた笑みをを見せてくれた。その笑みに、思わずキュンとしてしまう。格好良い！渋い、渋過ぎる。今の笑み、グツときた。

「何？リンは俺よりも、このおっさんの方が好きな訳？」

そんな私の反応が面白くないのか、ロディは少し拗ねたような顔をしていた。彼の過剰なスキンシップは困りものだが、その顔は少し可愛いかもしれない。

こんな感じで宴は始まった。私の想像とは異なり、海賊船は思いのほか陽気に賑やかだった。

「ところでリンは、この世界の事をどこまで知ってるの？」

未だに拗ねた顔をしていたロディが、焼き鳥のような物を食べながら話し出した。しつこい男はモテないぞ！

「どこまでって・・・ホーム口の魔術で世界が崩壊の危機に面して

いる事は、セインから聞いたけど。」

あとは、魔術が日常的に使用されている事くらいであろうか。

「インフェクターには会ったんだろ？何のインフェクターに会ったんだい？」

「何の・・・？」

はてさて、何のとは一体どういう意味なのであろうか。

「ありや、その様子じゃ知らないみたいだね。インフェクターには、三つのパターンがあるのさ。今までの推察からすると、奴らはホーメロの魔術により思考が停止してしまったと考えられている。ただ、自らの欲求に忠実な人間。」

思考が停止、欲求に忠実、それに三つのパターン？私が森の中で出会った三人のインフェクター達は、皆同じ感じで違いなんか分かんなかったが。ロデイにそれを伝えたと、それは食欲者だねと答えられた。食欲者？

「リンは、人間の欲求って何だと思う？」

欲求・・・人間の三大欲求の事だろうか。

「食欲と睡眠欲と・・・性欲？」

「そのとおり。人間には持って生まれた、この三つの欲求がある。腹が減れば何かを食うし、眠いなら眠る。性的欲求が起これば、誰かで・・・まあ相手が居なければ自ら処理する。とまあこんな感じで、奴等はこの欲求のままに素直に行動し生きているのさ。」

ロデイの説明を受け、私は少しゾツとした。思考が停止し、理性もなく自らの欲求を満たす為だけに動き回る人間達。そんな人間達に集団で襲い掛かれれば、ひとたまりもないであろう。

「そして、とうとうこんな唄も出来る始末・・・」

「食欲者と出会えば、すぐ逃げる。肉を喰い千切られ、貪り喰われるぞ。睡眠欲者と出会えば、幸運者。足音立てずに、その場を離れる。性欲者と出会えば、天国行き。快樂と共に、どの道御陀仏さ。」

横から割り込んできた声の方に目をやると、其処には豪快にお酒を飲んでいるイストがいた。

「この世界で、この唄を知らない者はいない。誰が作ったのかは知らないが、皮肉なものだ。この世界では、この唄が絶対のルール。もし逆うのならば、待っているのは闇の世界のみ。奴等の仲間入りだ。」

そう言ったイストは、本当に皮肉そうに笑っていた。

第十七話（後書き）

新キャラ、二人登場です。

第十八話（前書き）

第十八話には、下品というか非常に残酷な描写が入ります。
苦手な方は絶対に読まないで下さいね！

第十八話

「出会うインフェクターの殆んどが、食欲者か睡眠欲者かな。性欲者に出会うのは稀だね。食欲と睡眠欲の方が、性欲よりも強いから食欲と睡眠欲が満たされて、初めて性欲が出てくるんじゃないのかなあ。俺は性欲者を見た事がないんだ。」

ロディはそう言いながら、今度は果物らしきものに手を出し始めた。どれだけ食べるの。

確かに食欲や睡眠欲に比べ、性欲の方が弱いという事は聞いた事がある。

「俺は性欲者を見た事があるぜ。」

またしても聞いた事がない声が聞こえそちらを振り向くと、其処には燃えるような短い赤髪に、同色の赤い瞳をした男が居た。男はとても大きく、そしてごつい。男の目つきから凄く好戦的に感じられ、とても強そうだった。幹部三人目といったところか。

「俺が見たのは悲惨だったぜ。女のインフェクターに男が襲われてたんだ。その女は、性欲丸出しの性欲者だった。あつと言う間に男を押し倒し、ブツを取り出して銜えだしたのさ。初めは抵抗していた男も与えられる快感に次第に大人しくなっていた。」

うわ、なんか聞いていて気分が悪くなってきた。

「まあ銜えられた時点で、男の感染は確実だけだな。魔術に汚染された女の唾液が、男のブツの先端から入り込み体に広がっていく。」

な、なるほど。それで、性欲者と出会えば天国行き。快樂と共に、どの道御陀仏さという訳か。

「男は女の愛撫でもう少しというところまで昇りつめていたんだが、女の動きがピタッと止まった。その後が、もう悲惨だったぜ。男の絶叫が響き渡った。何てことはない。女の欲求が性欲から食欲に切り替わったのさ。結果、女のインフェクターにより男のブツは噛み切られた。」

「・・・・・・・・・・」

「今まで熱に浮かされていた男の顔が、あまりの激痛の所為であつと言つ間に青褪めていった。まあ、インフェクター相手に感じてしまった男が悪いのさ。自業自得だな。まあセックスの最中に、性欲から食欲に切り替わる女もどうかと思うがな。」

そう言つて愉快そうに笑う赤髪男に対して、私は思わず言葉を失う。これは、うら若き乙女に聞かせるような話ではないだろう。被害に遭つた男性もあまりの激痛に青褪めたらしいが、今の私も相当青褪めている筈だ。自信がある。うう、ちよつと吐きそう。

「レス、そのくらいにしておきなさい。リンが青褪めてますよ。」
そう言いながらその声の主は、私に飲み物を渡してくれた。こげ茶色の茶髪に、同色の瞳の優しそうな男の人だった。うう、ありがとうございます。

ちなみに赤髪男の名前は、レスと言つらしい。

「全く、度が過ぎますよ。」

男の人が軽く窘めるが、レスは悪びた様子もなくお酒を飲んでいった。

貰つた飲み物を飲んで少し落ち着いた私は、改めてその男の人を観察してみる事にした。こげ茶色の髪と瞳。この世界で出会つた人達の中でも、一番馴染みのある色だ。色素が濃ければ、魔力は低いと言つていた。つまりこの男の人は、魔力が低いという事になる。しかしこの人も、どうやら幹部クラスのようなうだ。優しそうな外見とは裏腹に、実は強いのだろうか。

「私はアロンです。よろしく願ひしますね、リン。」

「お、願ひします。」

アロンの穏やかな物言いに、私は思わずホツとする。よかった！今まで出会つた人達の中でも、一番まとまそうな人だ！

突然の常識人の登場が嬉しくニコニコしていると、急にお腹に何かが巻き付き、もの凄い勢いで引つ張られた。

「うわっ！」

「随分、皆と仲良くなつたものだな。」

耳元でそう囁かれ、思わず体がゾクリとした。恐る恐る振り向くと、其処には妖しい笑みを浮かべたセインが私を見ていた。どうやら先程お腹に巻きついたものは彼の腕のようで、私は胡座を掻いた彼の膝の上に座らされたらしい。

「おまえを拾ってきたのは俺だというのに、妬けるではないか。」
拾ってきたって何！？私は猫じゃないんですけど！それに妬けるって、あなたさっき「おまえのような色気の欠片もないような女に欲情するほど、落ちぶれてはいない」なんて言っただけ？
色々と言いたいのが、セインを前にすると妙に赤くなってしまう私は、何も言い返す事が出来なかった。そんな私を見て、セインは本当に愉快そうに笑っていた。

第十八話（後書き）

またまた新キャラ二人登場。

第十九話

セインの膝の上に座らされたまま、私は宴の時を過ごしていた。

「リン、これも食べなよ。美味しいよ」

そう言ってロディが渡してくれたのは、マンゴーのようなオレンジ色の果物だった。離れていてもこちらにまで甘い匂いが漂って来ており、とても美味しそうである。実はこれまでにロディに散々色々な食べ物を勧められて少々お腹がいっぱいになっていたのだが、甘いものに目がない私はついと手を伸ばしてしまう。

「あ、美味しい。」

「でしょ？」

口に入れた瞬間に甘い果汁が広がり、思わず顔が綻ぶ。そんな私の様子を観察していたロディが、突然爆弾発言を落とした。

「リンって、なんか小動物みたいだね。」

「は？」

いきなり何を言い出すのか、この人は。

「だって小さくてチマチマと食い物をほうばってるところとか、正しく小動物みたいじゃないか。」

何、それ！誤解がないように言っておくが、私は決して小さくはない。この世界の人達が、基本的にでか過ぎるのだ。

私が少し膨れていると、ロディは軽快に笑い出した。

「まあ、いいじゃないか。それよりも、美味しかっただろ？もつと食べな。」

そう言ってロディは、先程のオレンジ色の果物を更に勧めてくる。まあ、いつまでも膨れていても仕方がない。確かに美味しかったし、甘いものに罪はないので有り難く頂くとしよう。

そうして暫らくオレンジ色の果物をチビチビと摘まんでいたのだが、急に少し体が熱くなってきたのだ。心なしか意識もフワフワとしている気がする。一体どうしたというのだろう。

不思議に思っていると、今まで静かにお酒を飲んでいたセインが急に話し出した。

「ロディ、そのくらいにしておいてやれ。どうやらこれはアルコールに弱いようだ。」

『これ』ってまさか、私の事なのだろうか。酷っ！というか、アルコールとはどういう事なのだろう。私は、お酒には全く手を付けていない筈だが。

思わずロディの顔を見ると、ロディはバレたかというような顔をしている。

「あー、船長バラさないで下さいよ！あともう少しだったのに。」

何が、あともう少しなのだろう。頭の中がクエスチョンマークになっていると、イストが助け舟を出してくれた。

「それはマクテイルというアルコール成分が入っている果物だ。案外アルコール度数も高い。」

お酒入り！？果物にお酒って、そんな組み合わせ・・・言うなればウイスキーボンボンみたいな感じであろうか。というか、なんでそんな物を私に食べさすの！？

「恐らく酔い潰れた嬢ちゃんに何か・・・いや、からかおうとでもしてたんじゃないのか。」

今、確実に何か言い換えたよね？ロディは私に何をしようとしたの！？

女に飢えている輩が多いと言っていたセインの言葉を思い出し、思わず身震いする。怖っ！海賊、超怖い！

「うー。」

結構食べてしまった所為なのか、体を起こしているのが億劫になりセインに寄り掛からしてもらった事にした。自分の部下が起こした失態だ。責任を取ってもらおう。酔った所為でもあるのか、少々態度が大きくなっているような気がする。

「あー！いいなあ。船長、リン俺に下さいよ。」

私は物じゃないんですけど！

私の髪の毛を、セインが軽く梳いてくれる。それが気持ち良くて、私は思わず目を瞑った。そんな私を見て、ロディがボソツと「猫・・」と言った気がしたが気にしないでおう。

フワフワとした気持ちで、私はぼんやりと海賊達を見回した。そして、今まで気になっていた事を思い切って質問してみる事にしたのだ。

「ねえ、気になってた事があるんだけど・・・」

「何々？」

興味津々といった感じで、ロディがこちらに身を乗り出してきた。「・・・なす術もなく感染が広まったって聞いたけど、本当に止められなかったの？インフェクターになってしまった人達の中に魔術が使える人が居たとしても、思考が停止している訳だから魔術は使ってこない。ドーナ王国は、戦争で何度も勝ち続けてきた国だって聞いた。魔術の事はよく分からないけど王律魔術団も居たらしいし、本当に魔術で・・・攻撃するとかして止められなかったの？」

私がそう質問すると、辺りに静寂が響き渡った。何か聞いてはいけない事を聞いてしまった気がする。話を変えようと口を開きかけたその時、アロンが話し出した。

「・・・痛がるんですよ。」

「痛がる？」

「そうです。彼らは何もゾンビになった訳ではないんです。治癒機能は異常に高まっていますが、普通の人間と何も変わらない。痛覚もあります。ただ思考が停止してしまっているだけなんです。」

痛がる。そうか、攻撃したとしてもインフェクター達は痛がる。狂ってしまったとはいえ、今まで寝食を共にしてきた仕事仲間。そんな彼等を攻撃するのを、城の人達は躊躇ってしまったのかもしれない。

そういえば森で出会った狼も、インフェクターを傷付けないようにしていた。あれはインフェクターの血で感染しないようにしていただけなのかもしれないが、もしかしたら狼も痛がる彼等を見たく

なかったのかもしれない。

「攻撃すれば痛がる。しかし思考は停止し、自らの欲求のままに生きる人間達。奴等はあまりに人間らしくて、人間らしくない。」

そう言ったセインの表情からは、何も読む事が出来なかった。

第二十話

「あれ？」

どうやら、私は眠っていたらしい。目を覚まし最初に視界に入っただのが、木の板を張り巡らせた古びた天井だった。ゆっくりと体を起こし、辺りを見渡す。微かに見覚えのあるその部屋は、昨日案内されたセインの部屋だった。部屋に付いている窓からは、既に暖かな日差しが差し込んでいる。

どうやら私は、宴の最中に眠ってしまったらしい。誰かが、この部屋に運んでくれたのだろうか。セインに寄り掛かって眠ってしまったので、セインが運んでくれた可能性が高いが。そんな事をぼんやりと考えていた私を、急な頭痛が襲った。

「痛っ・・・」

思わず、体を丸めて蹲る。頭が痛い。どうして、こんなに痛いのだろうか。

（そうだ。）

こうなってしまった原因を思い出して、私は思い切り眉を寄せた。これは、完全なる二日酔いだ。昨夜ロディに、アルコール入りの果物をいっぱい食べさせられた所為だ。

（くそう、ロディめ。どうしてくれようか。）

そんな物騒な事を考えながら、私は再びベットに突っ伏した。

（あれ？）

再びベットに横になった私は、ある重要な事に気付く。この部屋には、ベットが一つしかない。それでは、昨夜セインは何処で眠ったのだろうか。もしかして、私がセインの寢床を占領してしまったのだろうか。もしそうであれば、申し訳ない事をしてしまった。

（後で、セインに謝ろう。）

そう思いながら何となくベットに横になると、布団から何処かで嗅いだ事のある香りが漂ってきた。凄く、落ち着く香り。何

の香りだったかとぼんやり考えていた私は、ハツとする。その香りの正体に気づき、そして勢い良くベツトから転がり落ちた。

「痛っ！ いったあ・・・」

勢い良く尻餅についてお尻が痛いのと、二日酔いの頭痛のダブルでダメージを受けた。しかしそんな痛みよりも、気づいてしまった事実の方が私にとっては衝撃的だったのだ。

（・・・セインの匂いだ。）

抱き上げられたり寄り掛からせてもらったりしたので、セインの匂いを覚えてしまっていたのだ。

そりゃあ此処はセインの部屋だし、彼は普段このベツトを使用している訳だから、彼の匂いがついてるのは当たり前的事だろう。

そう、当たり前で何も問題ない筈。でも・・・

（なんだか、セインに包まれてるみたいだった。）

ふと思わずそんな事を考えてしまった私は、顔がボンツと茹蛸のように赤くなる。一体、私は何を考えているのだろうか。人の匂いを嗅いで一人で勝手に妄想するなど、変態以外の何者でもないではないか。

ベツトの下で一人身悶え自己嫌悪に陥っていると、突然部屋の扉が開いた。

「おっはよー、リン！ よく眠れたか・・・」

そう言つて、テンション高く部屋に入つて来たのはロデイであった。そしてベツトの下に落ち一人身悶えてる私を見て、まるで奇妙な物を見るかのような目付きで見つめてくる。

「・・・何してんの？」

うるさい！ 放っておい下さい。

あれから私はロデイに連れられて、甲板へと向かっていた。何とか自力で自己嫌悪から立ち直った私は、隣を歩いているロデイの方に目を向ける。ロデイの顔を見ていると昨夜の出来事が沸々と思ひ

出され、思わず彼をじとーっと睨んでしまった。そんな私の視線に気づいたのか、ロデイもこちらに目を向ける。すると彼はこちらを指差し、いきなり顔が恐いと言って笑い出したのだ。そんな彼に、再び殺意が芽生えたのは言うまでもない。

「ところで、どうして甲板に向かつてるの？甲板で何かやってるの？」

米神をピクピクさせながら、私はロデイへの殺意を必死に引っ込め質問する。そんな私の葛藤を知る由なく、ロデイは満面の笑みで話し出した。

「ああ、今絶好のポイントに着いたからね。船を停泊させて、皆素潜りしてるのさ。楽しいから、リンもおいでよ。」

素潜り？つまり、遊んでいるという訳か。

それにしても、本当に呑気な海賊達だ。世界が崩壊の危機に面しているとは、考えられないくらいだ。この世界に来てからというもの、私が持っている海賊達のイメージがガラリと変わってしまった。

「早く、行こうよ！」

そう言って手を引っ張ってくるロデイを見て、私は小さく笑みが零れた。

第二十話（後書き）

ここまで読んで下さった皆様、本当にありがとうございます。
投稿、遅くなってしまうし申し訳ありません。

第二十一話

甲板に出ると、太陽の日差しが目に入り込んできた。眩しい。太陽はもう既に、かなり高い位置にまで昇っている。きっと、今はお昼くらいだろう。これは、相当寝過ぎたようだ。

「おう、嬢ちゃん。気分はどうだ？」

太陽の眩しさに目を細めていた私にそう言って声を掛けてきたのは、甲板の手摺りに寄り掛かりタバコを吹かしていたイストだった。頭が少し痛いけど、大丈夫。」

「ははっ。そりゃあ、二日酔いだな。」

可笑しそうに笑うイストを見て、私は思わず顔を顰めた。

（面白そうに笑ってますけど、あなたのお仲間の所為でこうなったんですよ！）

そう思いながら恨めしそうにイストの顔を見ると、彼は仕方がないといった感じで軽く私の頭をポンポンと叩いてきた。

「まあ、そう拗ねるな。ほれ嬢ちゃん、下を見てみな。」

そう言ってイストは、顎を使って海面の方を示した。何かあるのだろうか。そう思っ、私は手摺りから身を乗り出し海を覗き込んでみた。

「うわぁ・・・」

思わず、感嘆の声を上げる。何て事はない。眼下に広がる海が、南国リゾートの海のように透き通っていたのだ。しかし、ただ単純に透き通っているだけではない。海底まで、おそよ百メートルはあるのではないだろうか。普通の海ならば百メートル下の海底なんて海面からでは絶対に見えないだろう。それが今、この海では見えているのである。美しい珊瑚、そして色取り取りの魚達が華麗に泳ぐその様が、船の上から見下ろせる。美しくまるで幻想のような世界に、私は呼吸の仕方も忘れ見惚れていた。

「絶景だろ？これは、この海域でしか見れなくてな。今日は風もな

く、海も穏やかだ。この条件が重ならなければ、絶対に見る事が出来ない。運が良かったな。」

なるほど。私は中々、運が良いらしい。まさか生きている間に、こんなにも美しいものを見れるとは思ってもしなかった。比喻ではあるが、もういつ死んでも良いってくらい私は感動していた。

「ほら、リン。早く行くよ！」

その声に、私は思わずハツとする。ロディの事をすっかりと忘れていたのだ。彼は私がイストと話をしている間に、服を脱いでズボン一枚となっていたらしい。引き締まった身体が、惜し気もなくさらされている。うら若き乙女に、それはちよつと刺激が強すぎるのではないだろうか。何となく直視出来ない。そんな私の葛藤を知る由もなく、ロディは私の手を引いて勢い良く手摺りから身を乗り出そうする。そんな彼を、私は慌てて引き止めた。

「ちよ、ちよつと待って！どうするの？」

「どうするのって、泳ぐのさ。目の前にこんなにも美しい海が広がってるんだから、泳ぐしかないでしょ。」

確かに、こんなにも綺麗な海なんだから泳いでみたいとは思うが、このまま海に引きずり込まれるなんて堪ったものではない。服が濡れてしまうではないか。居候の身である私には、服がない。セインに話せばきつと貸してくれるとは思うが、図々しく強請る気にもなれない。此処に置いてもらっているだけでも有難いのだ。

「私は、いいよ！ロディ一人で行って来て。」

「えー、何でさ。俺はリンと泳ぎたいのに。」

そう言つて、顔を膨らませるロディ。ちよつと可愛いではないか。「せっかく連れて来てくれたのに、ゴメンね。すつごく綺麗で、感動したよ。でも私は、此処で見てるだけでいいから。」

「えー。」

「ロディの事、ちゃんと見とくから。ほら、行って来て。」

そう言つてロディの背中を押すと、彼は渋々ながらも了承してくれた。

「分かったよ。その代わり絶対此処に居ろよな。」

私が頷くのを確認すると、ロディはそのまま手摺りに手を掛け海へと飛び込んで行った。

「あつ。」

このセインの海賊船、少し、いやかなり大きい為、手摺りから海面まで結構な距離がある。それをそのまま飛び込むなんて、ロディは大丈夫なんだろうか。私は思わず手摺りに駆け寄り、海面を覗き込んでロディの姿を探した。

「リンー！」

声のした方に目を向けると、海面から顔を出したロディが笑顔でこちらに手を振っていた。そんなロディを見て、私は安堵と共に笑みが零れた。

第二十二話

海面にブカブカと浮かぶ海賊達を眺めながら、私とイストは甲板の手摺りに寄り掛かりマツタリとした時間を過ごしていた。陽射しที่そんなに強くない為、あれだけ寝たにも関わらず、気を抜けば再び眠ってしまいそんな気候だった。

「皆、気持ち良さそうだね。」

「ああ。」

元々、人間観察が好きな私だ。泳いでいる海賊達を見るのは楽しかった。物凄い勢いで泳いでいる者も居るし、中には結構深い所まで潜っている者も居る。息は大丈夫なんだろうか、思わず心配してしまう程だった。

「そういえば、イストは泳がないの？」

「俺は、いいのさ。」

そう言ってイストは軽く笑ったが、その笑顔にほんの少しだけ陰りが見えた気がしたのだ。何か聞いてはいけない事を聞いてしまったのかもしれない。どうしよう。一人悶々とそんな事を考えていた私に、イストが苦笑を漏らした。

「嬢ちゃんは察しが良いというか、何というか。いや何、嬢ちゃんが気にする事じゃない。俺はこれだからな。」

そう言ってイストは、左足のズボンの裾を捲り上げた。私は思わず息を飲む。イストの左足は、膝から下が義足だったのだ。

「昔、少しヘマやらかしてな。腐る前に、切り落とさなきゃならなかったのさ。泳げない事はないが、不恰好になっちまう。そんな格好悪い姿、嬢ちゃんには見せられないだろう？」

何でもない事のように軽く振舞うイストだが、足を切り落としたなんて相当辛い過去だろう。私はイストに、すごく嫌な事を言わせてしまったのかもしれない。

「・・・ゴメンなさい。」

落ち込み頂垂れる私の頭を、イストが軽くポンポンと叩いてきた。
「だから、嬢ちゃんが気にする事じゃねえんだよ。確かに昔は色々
と嘆く事もあったが、今じゃ本当に何とも思っちゃいない。だから、
そう落ち込むな。」

イストの温かい手を頭に感じながら、私は少し悲しくなった。辛
くない筈がない。何とも思っていない筈がない。きっと世界には、
他人よりも自分が大事という人が圧倒的に多い筈だ。私も、その一
人かもしれない。もし自分が足を切り落として義足だったならば、
きっと何年経とうとも辛い気持ちは捨てられないだろう。更に他人
にそれを指摘されたら凄く嫌な気持ちになるし、その人を許せなく
なるかもしれない。それなのにイストは、自分よりも私を心配して
くれた。嫌な気持ちになった筈なのに、私を許してくれた。この人
は、凄く優しい人だと思った。

それから暫らく二人で海を眺めていたのだが、海底近くで何かが
キラツと光ったのだ。

「ん？」

光に気づいた私は、その正体を確かめなるべく船から身を乗り出し
た。それは太陽の光に反射し、キラキラと銀色に輝いている。

「え、ええ！？ちよ、イスト！」

キラキラと銀色に輝く光の正体に気づいた私は、隣に居たイスト
の袖を思い切り引っ張る。

「一体どうしたんだ、嬢ちゃん。」

袖を引っ張って離さない私を見て、イストが首を傾げた。

「あれって、セインじゃない!？」

海底でキラキラと銀色に輝く光の正体。それは間違いなくセイン
だった。セインの銀髪が、太陽の光に反射して、キラキラと輝いて
いたのだ。

「ん？ああ、そうだな。」

「ええ!？」

当たり前のように肯定するイストに、私は多いに驚愕した。海底

まで百メートルはある筈だ。私の勘違いではない。断言出来る。それをセインは、酸素ボンベもなしで潜っているのだ。

「大丈夫なの！？息は？水圧は？」

「船長だから大丈夫なのさ。」

船長だから大丈夫って、どんな理屈だ。見た目や雰囲気からして普通ではないとは思っていたが、本当に普通じゃなかったとは。とんだ超人だ。

もしかすると、なにか魔術でも使っているのかもしれない。一人でそう簡潔していると、視界の端に新たに不吉なものが横切った。

「イ、イスト！？」

「今度は、何だ？」

再び激しく袖を引っ張る私に、イストが少し厭きたような声を出した。

「あれって鮫じゃない？」

私が視界の端に捉えたものとは、私の世界では考えられない程の大きな大きな鮫だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2694q/>

あの頃の私達へ

2011年10月26日15時10分発行